

平成 27 年度文部科学省初等中等局公募

「総合的教師力向上のための調査研究事業」採択プログラム

学校インターンシップの改善

—コンテンツからコンピテンシーへの飛翔—

平成 27 年度成果報告書

岐阜聖徳学園大学教育学部 G P 委員会

平成 28 年 3 月 31 日

目 次

第0章	はじめに	1
第1章	学校インターンシップで高めうる資質能力 および岐阜県教委9講座開設に関わる岐阜県教委との交渉	3
第2章	学校インターンシップに関わる岐阜県教委講座ノート	8
第3章	県教委9講座受講アンケート	37
第4章	小学校教育実習直後アンケート	64
第5章	学校インターンシップ体験校（小中学校）訪問レポート	74
第6章	学校インターンシップを行う他大学訪問レポート および 他大学からの来訪者レポート	77
第7章	ポートフォリオシステム作成	84
第8章	平成28年度の本学「学校インターンシップ」の運営を巡って	93
第9章	平成27年度文部科学省公募調査研究本学申請書	98

第0章 はじめに

「学校インターンシップ」を通じて、新任教員に求められるコンピテンシー（資質能力）のうち如何なるものを育成しうるか、その為に如何なるカリキュラムを作成すべきか、それが本研究である。

平成 27 年度 4 月に岐阜県教育委員会総合教育センターと連携し、9 つの資質能力を叩き台とすることを定め、平成 27 年度 7 月を中心に県教委から指導主事の派遣による学校インターンシップ講座全 9 回を実施した。

各講座では、各資質に関わり「学校インターンシップ」体験校で活動する上での課題を 3 つずつ頂いた。各講座で受講アンケートを実施し、講座の狙いの理解（数値）および感想（記述）を回収し、その後分析した。

また本教育学部のコアカリキュラムである 3 年次小学校教育実習の事後指導（平成 27 年 10 月）で、上記 9 講座で獲得しうる資質能力の向上にかかわるアンケート調査を実施した。この「習慣」「安全」「ICT」「マナー」「英語」「学級」「特支」「教科」「行事」の 9 講座について各 3 項目ずつアンケートを採った。「安全」1 項目、「英語」3 項目で講座出席者に優位性ありと考えられた。天井効果が出た「習慣」2 項目、「安全」1 項目、「マナー」2 項目、「学級」3 項目、「特支」1 項目、「行事」2 項目は、本学学生の持っている「人間関係大好きで教員志望になった」的などころの熱心さの現れと考えられる。

学校インターンシップ体験校を訪問し、学生の活動の様子の観察、体験校担当教員へのインタビュー、体験学生へのインタビューを行った。インターンシップ経験の貴重性、如何なる能力が直接付いたかを明確には立証はできないが将来役立ちうる様々な経験ができる事は、確認できた。小学校の放課の時間に行われる「遊び塾」で、「学校安全」に関わる資質能力、および「学級経営」に関わる力のベースを育てていると考えられるケースも確認できた。

学校インターンシップで、注目される取り組みを実施してきた、静岡大学（平成 27 年 12 月）、関西大学（平成 28 年 1 月）を訪問した。そこで得られた知見であるが、学校インターンシップでは、体験校でのコンテンツに介入することは難しいが、大学での振り返り（省察・リフレクション）を重視して効果を上げることである。

また、愛知東邦大学の今津孝次郎氏に本学を訪問して頂き、平成 27 年 12 月の中教審答申と学校インターンシップに関わるレクチャーを受け、岐阜聖徳学園大学と愛知東邦大学における実践的教員養成に関し双方の経験とアイデアを交換した。

当研究とも関連するが、教育学部 CP（クリスタルプラン）委員会で、学校インターンシップを含む本学の実践的教員養成プログラムである「クリスタルプラン」の 13 の視座（資質能力）を確定した。

「学校インターンシップ」のカリキュラム開発であるが、平成 28 年度以降も継続して「学

校インターンシップ」県教委講座を岐阜県教委に依頼する予定である。平成 28 年度 3 年次以降の「学校インターンシップ」登録学生に対し、本学の発行する学校ボランティア修了証の取得要件に県教委講座に 3 回以上出席することを入れ、学校インターンシップ体験校で活動を行っていくことと並行してコンピテンシー獲得を意識させることとした。これは平成 27 年度 12 月の中教審答申に従い、将来的に「学校インターンシップ」が教員免許法上の選択科目となる事が予測されるのを視野に入れている。また、学校インターンシップの奨励と教育実習に向けた課題意識形成を目指し、教育実習校事前打ち合わせで、可能な場合には、児童と関わるインターンシップ活動を行う事もアイデアとしてある。学校インターンシップ体験校が記入送付する学校インターンシップ支援活動依頼記入用紙に、新たに、関連するコンピテンシー（資質能力）を書く欄をもうけ、現実の学校インターンシップと各コンピテンシーの関連の把握、および新しいコンピテンシーの開拓を図る。当調査研究「学校インターンシップの改善」を支え実行する学内教員組織であるが、現状において GP 委員会が学校インターンシップ代表教員を支援しているが、これは過渡的なものである。教員免許法および施行規則の改正により「学校インターンシップ」が教員免許法上の選択科目になる暁には教育学部教育実習委員会の傘下に運営組織が形成されることになる。

今後、「学校インターンシップ」を含む本学の実践的教員養成プログラムである「クリスタルプラン」の効果測定として、次の 2 つの電子ポートフォリオシステムを開発した：

1. 「学校インターンシップ」の事前指導時と事後指導時（計 2 回）での資質能力の測定。
2. クリスタルプランでの 13 の視座にかかわり、「学校ふれあい体験」事後指導時（1 年次）、「教育実践観察」事後指導時（2 年次）、「小中教育実習」終了時（3 年次）（計 3 回）での資質能力の測定。

第1章 学校インターンシップで高めうる資質能力および

岐阜県教委9講座開設に関わる岐阜県教委との交渉

本章では、本調査研究「学校インターンシップの改善 —コンテンツからコンピテンシーへの飛翔—」の実装に関わる岐阜県教育委員会と岐阜聖徳学園大学教育学部GP委員会の折衝の記録を記す。

県教委とGP委員会の第1回目の懇談について

懇談日：平成27年4月28日（火）9時50分から約45分間

懇談場所：岐阜県総合教育センター

面談者（県教委側）：丹羽俊文総合教育センター長兼教育研修課長、石原嘉和研修企画監

面談者（大学側）：福田GP委員長、佐藤GP副委員長、中島GP委員、小林教育実習委員長・教育委員会連携担当

「県教委初任研のコンセプトは『学び続ける』ことである。この『学び続ける』エネルギーを大学生のうちから育てたいものである。」との趣旨のお話をうかがった。

県内の新任小中学校教諭でいきなり学級担任にあたる者が100名いるそうである。このこともあり、大学生のうちからコンピテンシー（資質・能力）を育てることの重要性が指摘された。

「大学からの依頼内容について

1. 県教委および大学両サイドの懇談を通じた教員志望学生に求められるコンピテンシーの明確化
2. 卒前教育である大学開設講座への県教委側からの講師派遣
3. 卒後は大学側から県教委への講師派遣

という方向で県教委および大学両サイドのWin Winの関係で進めたい。」

とのお話を頂いた。

具体的には、教員志望学生に求められるコンピテンシーについて県教委と大学との懇談の中で意見交換しながら、コンピテンシー獲得を促進する為の大学開設講座でのコンテンツおよび（県教委から派遣される）講師を考えていく形で、気楽に進めていくことになった。

県教委から派遣される講師は、県教委のスタッフだけでなく、県教委から紹介される市

町村教委指導主事や一般人（例えば話し方講座）も含むことになる。

5月12日に県教委初任者研修第一回が開かれるが、そこに出席した初任教員に対し、どんなコンテンツを教員志望学生時代に聴けたら良かったと思うか尋ねて頂けることになった。（初任教員の生の声をアンケートで聞かれるそうである。）

この大学開設講座を受けた大学生に対し、卒後、どのような教育的効果が現れるか効果測定をしたらどうかとの話も頂いた。

この間、佐藤 GP 副委員長が、本学 GP 委員会の案を県教委に提示

本学が下記の講座開設を提案した

- 1 学校ボランティア論[義務]
- 2 学校の安全（基本）[義務]
- 3 外国人児童生徒対応[選択]
- 4 TT の技法[選択]
- 5 ICT 活用（電子黒板など）[選択]
- 6 外国語活動支援[選択]
- 7 野外活動支援[選択]
- 8 体力・運動能力の向上 [選択]
- 9 多様な学習形態(上級)[選択]
- 10 「子ども」の捉え方(上級)[選択]
- 11 学校の安全（応用：感染症対策）[選択]

県教委と GP 委員会の第 2 回目の懇談

懇談日：平成 27 年 5 月 25 日（月） 9 時 30 分から約 1 時間

懇談場所：岐阜県総合教育センター

面談者（県教委側）：石原嘉和研修企画監、中村行雄研修企画係課長補佐兼係長、伊藤直輝基本研修係課長補佐兼係長、川田英樹基本研修係課長補佐、今井清恵基本研修係課長補佐

面談者（大学側）：福田 GP 委員長、佐藤 GP 副委員長、中島 GP 委員

まず県教委から資料も交え、初任者教員養成の立場から話を頂いた。

大学側としては初任者研修に携わる県教委講師派遣で教員志望大学生の資質向上を図るものであるが、県教委の方としては、文科省より能力指標の作成が求められており、研修・養成段階でどういう事をすれば良いかの検証ができると良い。

例えば、横浜市教委では「求める着任時の姿」を定めている。岐阜県教委としても、大学を出てこれから働くとき、これだけは（業務について）学んでおいてほしいという事が

ある。

初任者研修には、

1. 県総合教育センター開設
2. 各地区教育事務所開設
3. 市町村教委解説
4. 校内研

がある。

1. は一般的な資質向上だが、2. 3. のレベルだと教科指導が中心になる。

この調査研究は単年度ではあるが、今年度の開設講座のアンケートを採り、また教員になつてからどうだったかをリサーチできると良い。

以上を鑑み「大学でこそできる事は何か」を追求したい。

岐阜聖徳学園からの県教委講師派遣開設講座案について細かく見ると、

・「学校ボランティア論（義務）」では、むしろ、校務分掌・学級担任を扱ったら如何か。

・「学校の安全（基本編）（義務）」にはマナーも組み込むと良いであろう。マナーは、県教委の初任研アンケートで、着任後よりむしろ大学生時代で学びたかったことの比率が高かった。また、受け持ち児童生徒の食物アレルギーに関しては、着任時4月最初には出来てないといけない事である。

・（地域によっては外国人の居住が少ないので）「外国人児童生徒対応」よりADHDなど発達障害対応の方がよい。それでもあえて「外国人児童対応」ならより専門的な外部の方も紹介できる。

・今は「TT」よりも少人数指導の方が多く実践されている。一人で教えていける事が重要である。初任者の悩みの5割は教科指導である（小学校ではとりわけ、国語、社会）。

・「野外活動」より「学級経営」の方が新任者には重要であり、強いて言うなら学級経営の中の野外活動と捉えるべきである。

・「体力の向上」より大学卒業後1か月で迎える学級懇談会（地域・保護者との連携）が喫緊の問題である。

・「多様な学習形態（上級）」は、色々な教科毎の方法を交代でレクチャーすると良い。

応用編としては「学校の安全（応用編）」より「道徳」指導を行う方が必要性が高い。

県教委から9人の先生の御名前が例示された。

まとめると、真に現場として必要な事を教えて頂けると良いのではないか。そして、欲張らずに精選も必要である。

学校インターンシップ現場に関して、現場は多忙であることは踏まえつつ、小・中・市町村教委にこういう力を着けたいともっと大学からいう事は良い。

「（免許法上の必須科目である）教職実践実習」「学校インターンシップ」と初任者研修の繋がりを考えていきたい。

[大学からの発言]

- ・大学側で、大学入学形態・GPA（成績）・教員採用結果・学校インターンシップ受講状況の相関を調べたい。
- ・県教委派遣講師の先生から学生へ宿題を出してもらい、学生がインターンシップの現場（小中）で先生に質問するアイデアもある。
- ・当調査研究での検証の対象は、県教委開設講座だけか、それとも学校インターンシップ現場での活動も入るか。当調査研究の到達点は、学校インターンシップで着きうる資質能力の抽出までか、それともエビデンス測定まで含むか。

[県教委側回答]

大学のやり方で、検証してもらえば良い。大学側による調査研究結果をそのまま文科省へ能力指標として出すわけではないので。

この間、佐藤GP副委員長が、本学GP委員会の案を県教委と折衝する

9つの県教委講座が確定する。

1. 社会人としてのマナー [基礎] (社会人、学校でのマナー)
2. 学校の安全 [基礎] (学校内外における危機管理)
3. 特別支援を必要とする児童・生徒への対応 [基礎] (ADHD・発達障害・外国人児童生徒への支援)
4. 教科指導 [選択] (課題提示、本時の展開、TTの技法)
5. 生活習慣・学習習慣指導 [選択] (基本的生活習慣・学習習慣の指導)
6. ICT活用 (電子黒板 など) [選択] (学習目標を達成するためのICT機器の活用)
7. 外国語活動支援 [選択] (コミュニケーション能力の素地を養う指導)
8. 学級経営の実際 [選択] (自主的・自治的な態度を養う学級経営)
9. 学校行事の実際 [選択] (学校行事の位置づけとその価値)

県教委とGP委員会の第3回目の懇談

懇談日：平成27年8月17日（月）16時

懇談場所：岐阜県総合教育センター

面談者（県教委側）：石原嘉和研修企画監

面談者（大学側）：福田GP委員長、佐藤GP副委員長

6月末から7月末までの県教委講座を終えてのお礼を兼ねて訪問した

県教委講座受講性アンケートを集計した「2015 県教委講座受講アンケート分析結果」「2015 インターンシップに係る岐阜県教委講座学生感想抜粋」を大学から持参した。

県教委側からの御発言3点：

1. 県教委は、この8月、乗鞍で初任者研修合宿を行った。県教委の指導主事は、初任者に魅力あるレクチャーをしようと頑張っていた。
2. (学校インターンシップでは) 市町村支援員的な学生が欲しい。
3. 2015年7月16日の中教審教員養成部会の中間まとめでの(県教委主導下に教員養成大学と市町村教委を交えた)教員養成協議会設置のアイデアを受けて、すぐに岐阜県教委のもと岐阜大学教育学部・岐阜聖徳学園大学教育学部も交えた会議を持った。次年度以降の岐阜聖徳学園大学「学校インターンシップに改善」への協力については、一大学との関係でなく全県の枠組み(仮称：教員育成協議会)で考えていきたい。

第2章 学校インターンシップに関わる岐阜県教委講座ノート

この章では、平成27年7月を中心に設けられた岐阜県教委9講座の「講義内容」および「受講学生の様子」を記す。また講師の先生から頂いた「講座概要」も付す。

①生活習慣・学習習慣指導

2015. 6. 30 「基本的生活習慣・学習習慣の指導」 川田英樹 指導主事

②学校の安全

2015. 7. 8 「学校の安全」 伊藤直樹 指導主事

③ICT活用

2014. 7. 14 「学習目標を達成するためのICT機器の活用」 松田義彦指導主事

④社会人としてのマナー

2014. 7. 15 「社会人としてのマナー」 大平和子 指導主事

⑤外国語活動支援

2015.7.16 「外国語活動支援」 中村行雄 指導主事

⑥学級経営の実際

2015. 7. 22 「学級経営の実際」 横山真一 指導主事

⑦児童生徒への特別な支援

2015. 7. 23 「特別な支援を必要とする児童・生徒への対応」 篠田裕之 指導主事

⑧教科指導

2015. 7. 27 「算数科を通じた教科指導」 今井清恵 指導主事

⑨行事の実際

2015.7.30 「学校行事の実際：学校行事の位置付けとその価値」 多田仁 指導主事

第2章① 学校インターンシップに関わる岐阜県教委講座ノート

2015. 6. 30 「基本的生活習慣・学習習慣の指導」 川田英樹 指導主事

講義で話された内容

教師とは？

マルちゃんの先生（戸川ひでゆき先生）

ガナルエーイチロー先生

昔の優れた学生による定義は、昨日の自分より今日の自分を高めてくれる人

340人に聞いて96.0%がYesと答えたのは、「やりがい＝子供の成長」

本日のゴール

- ・生活習慣と学習習慣を身につけることの大切さを理解する。
- ・生活習慣と学習習慣の指導法を考える。

学校における生活習慣・学習習慣

生活習慣・・・学校生活を営む上で必要な決まり、集団生活

学習習慣・・・学校規律・学習方法

なぜ生活習慣と学習習慣を身につけることが大切なのか？

[自立と共生] 豊かな自己実現、教育活動の基盤、児童生活の安心感

1学期：自分作り、2学期：仲間作り

「喧嘩、意欲的に取り組めない掃除、話を聴けない」という状況を受け1日のスケジュールでの指導をどうするか？

学生1・・・授業の必要性に気付かせる（＝意義を伝える）。

学生3・・・喧嘩をなくすには、クラスの中を深めるために休み時間にレクをしたり帰りの会で良い所見つけ（自己肯定感向上）を行う。

学生4・・・掃除に関しては、クラスの中で話し合いを行う。

川田先生・・・目の前にあることより根本に着目できるセンスは素晴らしいです。

文科省調査では、国語の正答率は、[学校を楽しいと思うこと、学校の決まりを守る、友との約束を守る、人の気持ちがわかる]と相関があり、[図書館に行く]との相関はそれ程ない。

実態把握、具体的な指導援助

朝の会では教師の立ち位置は固定せず全てを観る・・・表情に全てが出る

授業の前に教室に行って確認することは？

- ・全員の所在や表情の確認
- ・教室の環境を確かめる（教壇に現れる）
- ・机の並び方
- ・始まりの挨拶

児童生徒の実態把握

- ・必ず1人1人
- ・こまめに観察
- ・変化に敏感
- ・日頃のコミュニケーション

褒めるとき

自分の感動したことを伝える（子どもは大人を見抜く天才）

叱るとき

叱る基準を持つ。行為と人格を分ける。アイ（I）メッセージを送る。

何を指導したかより、誰が指導したかがポイント！！（これが日頃のコミュニケーション）

どの様に掃除指導を行うか？

- ・話を聴く
- ・活動を行う意義を確認
- ・今後の目標を確認
- ・見届け（できたら認める）

やる気を育てる

- ・小さな変化を見逃さない。
- ・その場で認める。
- ・一人一人に徹する。
- ・コメント力をつける。

受講学生の様子

県教委講座初日で、事前登録数より多くの学生が、熱意を持って出席した。隣の席の学生と議論するようなグループワークにも熱心に取り組んだ。

講座概要

ご所属(教育研修課)

お名前(川田 英樹)

■講座名 基本的な生活習慣・学習習慣の指導

■獲得させたいコンピテンシー(資質・能力)

- ・生活習慣・学習習慣における児童生徒の実態を的確に把握する力
- ・児童生徒に生活習慣・学習習慣を身に付けるために指導を工夫する力

■本講座の内容

- 1 なぜ、生活習慣・学習習慣は大切なのか【講義】
 - ①基本的な生活習慣・学習習慣とは
 - ②生活習慣・学習習慣の確立の意義
 - ③生活習慣・学習習慣と学力との関係
- 2 どのように生活習慣・学習習慣を確立していくのか【演習】
 - ①基本的な生活習慣・学習習慣を身に付ける指導
 - ・実態把握の仕方(どのような場面でどのように把握するか)
 - ・個に応じた指導・援助、全体への指導・援助
 - ・授業で心掛けたいこと

■インターンシップで学んでほしい内容

- ・児童生徒の生活習慣・学習習慣を学級担任はどのように把握しているか。
- ・生活習慣・学習習慣について、個に応じた指導を学級担任はどのように行っているか。
- ・児童生徒のやる気を学級担任はどのように育てているか。

■大学側の準備

- ・パソコン ・プロジェクター ・スクリーン

第2章② 学校インターンシップに関わる岐阜県教委講座ノート 2015.7.8 「学校の安全」 伊藤直輝 指導主事 (中島 記)

○学校の安全～学校とは子どもの命を守り輝かせる場所である～

- ・学校でたったひとつ教えなくてはいけないことがあるとすれば、それは命の大切さ
- ・伊藤先生が学級担任をもっていたときの経験：中学校2年生の生徒が交通事故にあった

○インターンシップ・教育実習において子どもの安全をまもるために

- ・学校安全の責任は、インターン生・教育実習生 0%、教職員 100%
- ・教員になった瞬間、学校安全の責任が発生する。どんな言い訳も通用しない
- ・学校の先生（校長先生、教頭先生）に必ず報告。学校安全の判断は校長、教頭なので必ず。
- ・自分が担任教師ならどうするかを考えて担任の先生の動きを観察する
→インターン生や教育実習生では子どもの対応はできない。それよりも担任の先生の動きを見よう
- ・少しでも重大だと思ったらすぐに報告すれば良い

○学校安全クイズ

①5年生の明日は理科、砂場で流れる水の働きを行う

- ・今日中にやらないといけないことは？
- ・明日、授業後に児童に指示することは？

学生からの意見

- ・砂場が固ければほぐしておく
- ・砂のなかに危ないもの（石など）がないか確認する
- ・穴を埋めておく

伊藤先生から

- ・動物のふんの有無の点検をする
- ・ビニールシート等を活用する
- ・手洗いの徹底を指導する
- ・使用した道具の片付けを行う
- ・すべてのことは、必ず自分の目で確認を！

②自転車の交通違反について

- ・3年以内2回以上の検挙または事故でどうなる？
講習（3時間 5700円）の受講義務
未受講者は5万円以下の罰金
- ・以上のことを子どもたちは知らないかもしれない。教師が知らなければ指導ができない
- ・学校の安全に関わる最新の情報や知識を教師が知っておく必要がある

③理科の実験の前に必ずやらなくてはいけないことは？

- ・現在は保護メガネをして実験を行う必要がある
- ・教師が事前に予備実験をすることが義務付けられている
- ・学年によってまったく異なるため、児童の実験の技能を把握し、安全性の高い実験方法かどうかを確認する

- ・器具の不具合を点検し、予備実験を行い、危険性に対しての安全対策を行う
- ・最悪のケースを想定し、それが起こったときの対処法を用意する

学校の安全を守るために必ず気をつけること

- ・すべてのことは、必ず自分の目で確認を！
- ・学校の安全に関わる最新の情報や知識を教師が知っておく必要がある
- ・最悪のケースを想定し、それが起こったときの対処法を用意する

○グループ討議

教師の立場で、対策、指導の工夫を考える

①運動会の練習における熱中症防止対策

- ・水分補給
- ・気温の把握や練習時間の工夫
- ・日陰の確保 など

②下校中の落雷事故の防止指導～教師がいないときに起こることへの指導は

③夏休み中の水難事故に対する防止指導～長期休暇の間に子どもたちが覚えていられるように

- ・実際に起こった事故について紹介する
- ・着衣水泳を経験させる
- ・通信を用いて保護者と連携をはかる など

④給食や弁当におけるアナフィラキシーショックの防止対策

○質疑応答

- ・落雷事故について指導の工夫は？

教師の事前把握が重要、雷の音が鳴ったら落ちる危険性があること、雷が落ちない場所を事前に教える

- ・下校時間に地震が起こったときに、学校へ戻ってくるように指導すべきか、家へ帰るよう指導すべきか

最近「避難訓練」ではなく「命を守る訓練」といい、どの年齢の子どもも自分の判断で非難ができる子どもを育てることが主流になっている。休み時間に訓練を行う学校が増えている。自分でもっとも危険の少ない避難方法を考えられるような訓練をすることが大切になる。

授業の様子

伊藤先生の体験からくる「命の大切さを教えなければならない」、「学校で子どもたちの命を守らなければならない」という思いを真剣に受けとめ、多くの学生が熱心に受講していた。学校安全のクイズでは、マイクを向けられた学生は自分の意見を述べることができた。また、グループ討議の時間は自分たちで決めたテーマについて話しあい、その後順に発表した。学生の発表に対し、伊藤先生から簡単なコメントをしていただけたことで、学生たちは自分たちの考えをもとにさらに学校安全の指導や対策について理解を深めることができた。



講座概要

ご所属(教育研修課) お名前(伊藤 直輝)

■講座名 学校の安全

■獲得させたいコンピテンシー(資質・能力)

- ・学校安全の重要性を理解する力
- ・インターン・教育実習において「学校の安全」に関わって、徹底しなければならないことを理解する力
- ・様々な学校の安全についての事案に対応する力
- ・学校における安全指導について、指導方法を工夫する力

■本講座の内容

- 講話「学校の安全」
～学校とは子どもの命を守り輝かせる場所である～
(学校安全の重要性を知る)
- 講話「インターン・教育実習において子どもの安全をまもるために」
- 学校安全クイズ
 - ①学校施設の安全管理
 - ②交通安全指導
 - ③実験・実習における安全指導
- グループ討議
 - ① 熱中症 ② 落雷事故 ③ 水難事故 ④ アナフィラキシーショック

■インターンシップで学んでほしい内容

- ・児童・生徒が学校で安全に生活するために学級担任が工夫していること。
- ・児童・生徒が組織的に学校安全管理を進めていること。

■大学側の準備

- ・プロジェクタ
- ・スクリーン
- ※パソコンは持参します。
- ・講座資料(添付ファイル)

第2章③ 学校インターンシップに関わる岐阜県教委講座ノート

2015. 7. 14 「学習目標を達成するための ICT 機器の活用」

松田義彦 指導主事 (高村 記)

獲得させたいコンピテンシー

- ・ 児童の実態に応じて、ICT を活用しながら指導する力
- ・ 児童の学習意欲を喚起させ、学習内容の理解と定着を図る指導について工夫する力

○ ICT とは

ICT=Information and Communication Technology (情報通信技術) の略

授業で活用可能な ICT 機器

パソコン, インターネット

実物投影機, 大型ディスプレイ

プロジェクタ, Web カメラ, タブレット PC

電子黒板 →2020 年には現在の 10 倍に

デジタルカメラ, デジタルビデオ

ソフトウェア, デジタルコンテンツ…紙にはない動きのあるコンテンツが魅力

○ 岐阜県教育が目指すもの

情報教育の推進と児童生徒の情報活用能力の育成

教職員の情報モラルの充実

○ ICT 機器の具体的な活用例

書画カメラを用いて, 実際にデモンストレーション

→ノートや教科書, 道具の使い方などを書画カメラを用いて示すことで, 比較的容易に ICT 機器を用いた授業展開が可能になる

- ・ 拡大して
模範解答をしている児童のノートを全員に示す
黒板用分度器は児童生徒が用いるものと違う (下に余白がない) ため, 使い方を誤る子どもがいる
- ・ 言葉のみでなく図と共に
- ・ 作図等の経過を示す
解き方のプロセスをプリントに書き込みながら説明できる
- ・ ねらいに即してつまづきを未然に防止
Excel を使って効率よく処理過程を提示する
- ・ 観察・実験の結果や自分の考えを発表
模造紙などを活用するよりも, 大画面でクラス全体に示すことができる

○ デジタル教科書の紹介

- ・ 立方体の見えない部分を分解して示せる
- ・ 動画でコンパスや上記での作図の手順を示せる
- ・ 一部分を拡大して示せる
- ・ 座標に素早く正確にグラフを示せる
- ・ 円と接線の問題など, 順を追って作図を示せる

○ ICT 機器活用についての調査結果

- ・ 学業成績
算数 (数学), 社会, 理科において, ICT を活用した授業の方が成績が上がっている。
- ・ 勉学意欲
「知識・理解」「関心・意欲」「思考力・判断力」において ICT を活用しなかった

授業より活用した授業の方が高かった。

- ・ 教員の意識

小学校 69.9%，中学校 67.5%，高校 38.9%，総計 64.4%の教員が効果があると報告

ICT を活用することで教師の授業力が向上し、それに伴い子どもの学習意欲が向上したのではないか？

- ICT 機器活用の留意点

- ・ 全てを ICT に依存しない

ノートの活用

模型などを触ることによる感覚

観察，実験を通じた理解

- ・ 情報の信憑性

- ・ 著作権や知的財産権などの理解

- 受講学生の様子

非常に熱心に聴講していた

実際の活用方法をデモンストレーションしていただいたために、具体的な活用方法のイメージがしやすかった様子

特にデジタル教科書のデモンストレーションの際には、どよめきが起こっていた

講座概要

ご所属(教育研修課) お名前(松田 義彦)

■講座名 学習目標を達成するためのICT機器の活用

■獲得させたいコンピテンシー(資質・能力)

- ・児童の実態に応じて、ICTを活用しながら指導する力
- ・児童の学習意欲を喚起させ、学習内容の理解と定着を図る指導について工夫する力

■本講座の内容

○ ICT機器の活用に関する今日的課題

- ・最近の動向
- ・第2次岐阜県教育ビジョンについて

○ ICT機器の具体的な活用例

- ・拡大して
- ・図と共に
- ・過程を示す
- ・つまづきを未然防止
- ・デジタル教科書の機能

○ICT機器活用の調査結果

○ICT機器活用の留意点

- ・各教科等における留意点

■インターンシップで学んでほしい内容

- ・授業のどの場面で、どのようなICT機器をどのように活用しているのか。
- ・ICT機器活用時の児童の反応、つまづき、授業の振り返りから、ICT機器の活用の効果と課題を考える。

■大学側の準備

- ・プロジェクタ
- ・スクリーン
- ※パソコンは持参します。
- ・講座資料(添付ファイル)

第2章④ 学校インターンシップに関わる岐阜県教委講座ノート

2015. 7. 15 「社会人としてのマナー」

大平和子 指導主事（阿部 記）

獲得させたいコンピテンシー

- ・教師として、児童生徒や他の職員、保護者、地域の方々に支えられて仕事をしていること。

講義概要

○おしゃれなマナー

- ・なぜ、今マナーなのか？
- ・社会集団の中でのマナー

学校は児童生徒だけでなく、教員・保護者・地域の人々との連携に支えられている。こうした人々との良好な関係を維持することが教員に求められる。

○自分を成長させ、学校や地域を変えるマナーを考える

いろいろな場面でのマナーを考える

(挨拶、言葉遣い、身だしなみ、電話対応)

クイズ形式でのトレーニング

言葉づかい：敬語、謙譲語、丁寧語の適切な使用に関するクイズ

身だしなみ：状況に応じた失礼のない服装の判断

各種シチュエーションを想定したロールプレイ

電話対応：担当者が不在の場合の取次ぎを想定したトレーニング

学外での保護者への対応：学外で遭遇した保護者から児童・生徒の様子を問われた時の対応を想定したトレーニング

○美しいマナーをもつために

受講学生の様子

当日は講師と受講者あるいは、受講者同士のペアによるロールプレイに多くの時間を割いていた。受講者同士も物怖じせず受け答えすることに努めていた。

電話対応、学外での保護者との対話など具体的なシチュエーションを提示した実演であったことから、受講者も緊張感のある態度で臨んでいた。

ロールプレイ時には、受講者は自身がとった対応の根拠や理由を説明することを求められたので、マナーの意義、必要性、特に良好な人間関係形成・維持の必要性を実感していた。

マナーを単なるしきたりとして強要するのではなく、相手の心象に与える影響を考慮したマナーの必要性を解説していたため、学生も共感・納得していた様子であった。

講座概要

ご所属(教育研修課) お名前(大平 和子)

■講座名 社会人としてのマナー

■獲得させたいコンピテンシー(資質・能力)

- ・マナーの重要性を考える力
- ・様々な場面での適切なマナーを考える力

■本講座の内容

- おしゃれなマナー
 - ・なぜ、今マナーなのか？
 - ・社会集団の中でのマナー
- 自分を成長させ、学校や地域を変えるマナーを考える
 - いろいろな場面でのマナーを考える
 - (挨拶、言葉遣い、身だしなみ、電話対応)
- 美しいマナーをもつために

■インターンシップで学んでほしい内容

- ・教師として、児童生徒や他の職員、保護者、地域の方々に支えられて仕事をしていること。

■大学側の準備

- ・プロジェクト
- ・スクリーン
- ※パソコンは持参します。

第2章⑤ 学校インターンシップに関わる岐阜県教委講座ノート

2015. 7. 16 「外国語活動支援」 中村行雄 指導主事 (佐藤 記)

獲得させたいコンピテンシー

- ・コミュニケーション能力の素地を養うための指導について工夫する力
- ・児童の実態に応じて Hi, friends! を活用しながら指導する力
- ・児童がコミュニケーションを楽しむことができる活動を工夫する力
- ・外国語活動において児童のコミュニケーション能力の素地を評価する力



講義の実際

◆はじめに

- ・学生に外国語活動をしたことがあるか聞く。
- ・外国語活動の映像を観る。「好きな漫画について語り合う映像」
- ・教師の立場になって、児童の立場になって、活動を楽しむ活動を行う。

◆学習活動

[指導者の立場]

- ・学習指導要領における外国語活動の位置づけとは?
- ・外国語活動の目標の確認 「コミュニケーション能力の素地を養う」
- ・コミュニケーションに関すること
外国語の楽しさの体験、外国語の積極的活用、言語のコミュニケーションの大切
- ・言語、文化に関すること
日本語と外国語の違い、日本と外国の文化性の違い

[児童の立場 Hi, friends! の活用]

- ・カードを使って職業のグループ分け
「～er」と「～ist」で終わることが多い。←体験的理解
「～家」と「～師」で終わることが多い。←体験的理解 ※英語も日本語も似ている

[音声や基本的表現を大切にす]

- ・慣れ親しむことが大切(やっていたら、なんかできるようになった)
聞く→繰り返す→自ら行う活動→コミュニケーションを図る活動

「チャンツ(歌)」「キーワードゲーム」「ミッシングゲーム」

[積極的にコミュニケーションを図る態度を育てる]

- ・相手の言っていることを繰り返して、自分の意思を伝える
「あこがれブックを作ろう」



[評価方法]

- ・評価基準の設定
体験的理解、意欲・関心・態度、外国語への慣れ親しみ

[グローバル化に対応した英語教育改革実施計画 H25.12]

- ・小学校中学年週 1～2 コマ、高学年週 3 コマ←教科化

講座概要

ご所属(教育研修課) お名前(中村 行雄)

■講座名 外国語活動支援

■獲得させたいコンピテンシー(資質・能力)

- ・コミュニケーション能力の素地を養うための指導について工夫する力
- ・児童の実態に応じてHi, friends!を活用しながら指導する力
- ・児童がコミュニケーションを楽しむことができる活動を工夫する力
- ・外国語活動において児童のコミュニケーション能力の素地を評価する力

■本講座の内容

○学習指導要領の理解

外国語活動の目標と取り扱う内容

○Hi, friends!についての理解

Hi, friends!の内容と構成

○外国語活動の体験

- ①言語や文化について体験的に理解を深めるための活動
- ②外国語の音声的な表現に慣れ親しませる活動
- ③外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る活動

○外国語活動の評価

児童のコミュニケーション能力の素地を評価するための視点

■インターンシップで学んでほしい内容

- ・児童が楽しく英語でコミュニケーションを図ることができるように学級担任が工夫していること。
- ・児童にコミュニケーション能力の素地を養うために学級担任が工夫していること。

■大学側の準備

- ・プロジェクタ
 - ・スクリーン
 - ※パソコンは持参します。
 - ・講座資料(添付ファイル)
 - ・教材(添付ファイル)
- ※参加される学生さんにはハサミを準備するようお伝えください。

第2章⑥ 学校インターンシップに関わる岐阜県教委講座ノート 2015.7.22 「学級経営の実際」 横山真一 指導主事

講義で話された内容

学級経営をすること＝教師の醍醐味を一番に感じられる

学級経営（担任）に対する印象

「嬉しい」、「大変」、「さみしい」、「おそろしい」の中心である「楽しい＋面白い」に來ないと教師に向いていないかもしれない。

小中教師は精神疾患になりやすい職業の一つ

自分勝手な生徒Aと先生のロールプレイ

（生徒役への指示：日直やクラスの子と比べる話をしてきたら怒ること）

集団づくりが目的だとA男さえいなければ良いクラスになるという思考になる。

目的は集団づくりでなく子どもの発展＝集団づくりは手段であり、個の成長が目的である。

今日のレクチャーのポイント＝集団指導で個が育ち、個の育ちが集団をさらに発展させる

「管理」（規律）【負の動機づけ（ブラックエンジン）】—「なれ合い」（信頼関係）【正の動機づけ（ホワイトエンジン）】、「超満足」—「荒廃」、の交点として「満足」がある。

【規律づくりと信頼づくり】

規律づくり（「教師からのルールを守る」から「自分らのルールを決め実行する」へ）

信頼関係づくり（「教師との信頼関係」から「教師とも子ども同士との信頼関係」へ）

4月：学級開き（黄金の3日間）

1学期から2学期にかけて：与えられる規律

2学期から3学期にかけて：創り出す規律

3月：学級解散

学級経営力（資質・能力）

1：情熱力、2：理解力（鋭い眼）、3：表現力（心に届ける）を4：人間関係力に繋げる。

規律づくりの「しかけ」：規律の良さを全員が納得、手順やモデルを示し方法を理解、実践しその良さを価値付け見届ける。

教師と子供の人間関係づくりの「しけけ」：教師が子どもとの接点を多く深く作る！

- 1 タッチ、ギュッ
- 2 朝一番
- 3 保護者
- 4 日記・生活の記録（事件の的になっている）

例：体育祭の練習

S：あー、ヤダ！

T 悪い例：みんなも疲れている

例：班長になれなかった。

S：悔しい

T 良い例：班長に立候補してくれて嬉しかったよ

例：(嬉しかったという) 目の合図

インターンシップで見えてきてほしいこと：

- ・どの様に子供に根差した規律づくりをしているか？
- ・どの様に先生と子どもたち1人1人の関係を構築しているか？
- ・どの様に子供たち同士の関係構築を工夫しているか？

受講学生の様子

学生は熱意を持って聴講し、学生からの質問が3点あった。

学生からの質問に答えて

- ・要支援の子を軸にして学級運営しよう。
- ・合唱で強く歌わない子たちには、録音して聴かせ、音の足りないのを自ら気づかせる。
- ・学級目標では、年間だけでなく、月ごとの **version** を作る。

講座概要

所属(教育研修課) 名前(横山 真一)

■講座名 学級経営の実際

■獲得させたいコンピテンシー(資質・能力)

- ・児童生徒一人一人がよりよい人間関係(信頼関係)を構築するための学級経営力
- ・学級経営の仕組みを理解した上での、個別指導と集団指導を使い分ける力
- ・個別指導と集団指導を効果的に使い分けながら、集団性を高める指導力

■本講座の内容

1 学級経営とは

(1)学級経営の醍醐味

- ・指導者(担任)にとっての学級経営のおもしろさを、事例を基に紹介します。

(2)学級経営の意義・意味

- ・なぜ学級を経営するのか、経営することによってどのような効果があるのかを確認します。

2 学級経営の基本的な考え方

(1)学級経営の仕組み

- ・学級経営の全体像を俯瞰し、構成する要素を洗い出します。

(2)学級経営に必要な資質や能力

- ・学級経営の意義や意味、仕組みを踏まえて、どのような学級経営力が必要なかを明らかにします。

3 学級経営のポイント

(1)規律づくりのための「しかけ」

(2)担任と子どもたちのよりよい人間関係を築くための「しかけ」

(3)子どもたち同士のよりよい人間関係を築くための「しかけ」

- ・1, 2を踏まえて、実際に学級経営を行う際に工夫できることを紹介します。

4 学級経営力を身に付けるために今からやれること

- ・学生生活における心構え・姿勢
- ・学生生活におけるストレスとの付き合い方

■インターンシップで学んでほしい内容

- ・学級担任が、「担任と子どもたち」の信頼関係を築くために、どんな工夫をしているのか見つけてほしい。
- ・学級担任が、「子どもたち同士」の信頼関係を築くために、どんな工夫をしているのか見つけてほしい。

■大学側の準備

- ・プロジェクタ
- ・講座資料(添付ファイル)

- ・スクリーン
- ・パソコン

※当日は、データ(USBまたはCD)のみ持参します。

第2章⑦ 学校インターンシップに関わる岐阜県教委講座

2015. 7. 23 「特別な支援を必要とする児童・生徒への対応」 篠田裕之 指導主事
(吉田俊和 記)

特別支援教育の目標

社会的自立をめざす

発達障害とは

- ① LD (学習障害)
- ② ADHD (注意欠陥多動性障害) → 5歳ぐらいからわかる
- ③ 自閉症スペクトラム症 → 3歳ぐらいからわかる(知的な遅れは伴わないことが多い)

<原因>

脳機能の障害であり、生育環境やしつけが原因ではない

薬や手術で治すことはできない → 障害を正しく理解し、対応することが必要

平成24年の文部科学省の調査では、6.5%の児童生徒が発達障害(40人クラスに約2名)

LDの特徴

- ・音読が苦手
- ・文字が正しく書けない(鏡文字)
- ・計算が苦手
- ・図形の理解が困難

<支援方法>

- ・苦手なことを強要しない → 努力だけでは難しいことを理解してあげる
「どうしてでないの？」は厳禁 → 傷つけるだけ
- ・得意なことや興味のあることで、やる気を引き出し、自信を持たせる
- ・読み書きは、行間を広くしたり、罫線を引いたり、録音して聞かせる。パソコンも有効。

ADHDの特徴

- ・忘れ物が多く、友だちとの約束を忘れてしまうことが多い。集中力がないので、人の話を最後まで聞けないし、課題に最後まで取り組めない。
- ・落ち着きがなく、じっとしてられない。席を離れてしまう場合もある。注意力も散漫なので、他からの刺激に注意が向いてしまう。
- ・考えてから行動することが難しいので、当てられてもいないのに勝手に答えたり、友だちに暴言を吐いたり、手を出してしまう。
- ・注意が別方向に向いてしまうと、並んでいることを忘れてたりするので、順番待ちは苦手。

<支援方法>

- ・空間、時間、手順を構造化し、見通しを持たせるようにする
- ・視覚や聴覚からの刺激をできるだけ減らし、集中力を保たせる
- ・教室の席を前にしたりして、距離の調整をする
- ・叱られることが多いので、過剰に「ほめる」ことで、自己肯定感を持たせる

自閉症スペクトラムの特徴

- ・感覚の特異性— 例) 非常ベル音の嫌いの子、普通の子が気にしない音にも敏感。
- ・特定のモノや細部へのこだわり— 例) 戸が開いていると気になる、道順や手順が気になる等。
- ・パニックになりやすい— 感情をコントロールできないと、大声を出したり、自傷行為をする場合もある。パニック中の声かけは厳禁、何よりも起こさせない環境作りを。
- ・複数の音が聞こえたとき、注目する音の選択が出来ない 例) 呼んでも、振り向かない
- ・暗黙のルールが理解されない 例) 「やかんを見といてね (沸騰したら火を消してね)」と言われると、ずっと「やかん」を見ている。
- ・オープンクエスチョンは苦手(昨日、何してた)なので、具体的な質問(昨日、ゲームした?)で会話する。

<支援方法>

- ・空間、時間、手順の構造化を行う。空間ならば、各場所は何をやる場所かを明確にする。時間ならば、時間順にすべきことを明示する。手順ならば、給食混乱を食べるまでの手順をはっきりさせておく。
- ・指示をスモールステップにして、迷わないようにする。例) 帽子を被って、カバンを持って、靴を履いてから運動場に出ましょう(帰りの時間ですから運動場に出ましょう、だと持ち物等を持たずに出してしまう)
- ・言葉かけは、具体的にかつ簡潔にする。視覚的情報も利用する。

発達障害の理解にとって大切なこと

- ・障害を正しく理解する。同じ障害ラベルでも、個人差がある。
- ・不適切な指導(怒りを見せる)は、自己肯定感を喪失させ、二次的な情緒や行動の問題を引き起こす
- ・複数の目で、児童生徒の実態を把握する。→ インターシップの場合は、周りに相談する

学生の様子

- ・概略的な知識を有しているものの、実体験は乏しいので、篠田先生の話は具体的な例がたくさん出てくるので、学生は真剣に聞きいていた。
- ・やはり、そういう状況に遭遇したら、どうすれば良いか困ってしまい、不安になるとの意見が出ていた。
- ・「かじクラブ」という発達障害の子どもと遊ぶ会の学生は、比較的慣れているとの自信を見せていた。

講座概要

所属(教育研修課) お名前(篠田 裕之)

■講座名 特別支援を必要とする児童・生徒への対応

■獲得させたいコンピテンシー(資質・能力)

- ・発達障がいを正しく理解する力
- ・児童・生徒の実態を理解しようとする力

■本講座の内容

- 発達障がいの理解
 - ・LD、ADHD、自閉スペクトラム症について
- 発達障がいのある児童生徒への支援について
 - ・支援の方法の具体例について

■インターンシップで学んでほしい内容

- ・障がいの有無にかかわらず、児童・生徒の行動の「なぜ」を考えて、児童生徒と接してきてほしい。

■大学側の準備

- ・プロジェクター ・スクリーン ※パソコンは持参します。

第2章⑧ 学校インターンシップに関わる県教委講座ノート
2015.7.27 「算数科を通した教科指導」 今井清恵 指導主事

講義で話された内容

はじめに：

Q：子供の頃、最も心に残る先生

学生：小6で模型で教えて下さった先生。褒めて下さった先生。人柄。

[要するに子どもを学習の主人公にしている]

基本的な考え：

Q：1 3 3 9 2 7 1 4 4 1 6 6・・・で30桁目の数は何か？

決まりを見つけようとしていくよ。掛け算九九を使っている。

算数科として：

見通しをもち筋道を立てて考え表現する能力。進んで生活や学習に活かす。

基本的な指導：(第4学年「面積」)

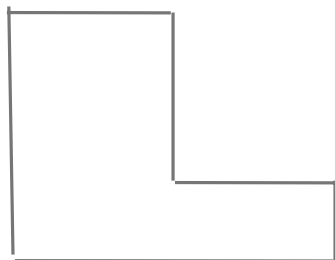
長方形の面積＝たて×よこ。

正方形の面積＝一辺×一辺。

どのような正方形でも長方形でも。

自分が今日どこまで通せるか自分の目標を決める。

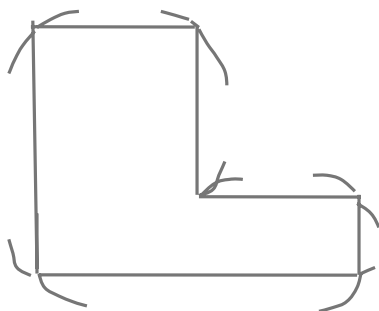
T：面積を求めることができるかな？



S：数字がない。

S：辺の長さがほしい。

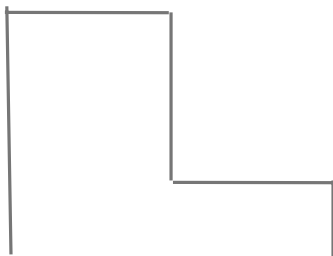
T：そこで、



と提示していく。

T：何か一つこれはできそうだと思うことがあるかな。

以上のように、



これ一つの提示の仕方だけでもかなり変わってきます。

1時間の授業をするに当たり：

ア：授業のねらいを明確にする。・・・肝

エ：ねらいや評価基準に応じて学習過程を工夫する。

イ：評価の観点の重点化・・・出口（入り口を決めたら出口を作る）

ウ：観点に応じた評価活動を考える。そして確実な見届けを！

（授業はアエイウで進むが、指導案はアイウエの順で作る。）

ア：教材研究では、教えることと考えさせることを明確にすること。

ねらいの明確化とは：

①対象（何について考えるか）、②出口（面積を求めることができる）

③考え、④活動（算数的活動は何か）

イ：評価基準：①から④全部は盛り込めない。

ウ：評価問題：教科書にある問題を活用する。

エ：まず実践してみたいと考えたことを書く。

・似ているところと違うところ。

・課題を最初に提示するときもあり。・・・評価の観点によりけり

・個人追求から全体追求へ（全体交流を、先生と特定の子だけで終わらせない為の発問が要る。・・・『深めの発問』）。

受講学生の様子

学生は熱意を持って聴講し、学生からの質問が3点あった。

学生からの質問

Q：生活で如何に面積を活かすか。

A：子どもの生活の中に入って行く。

Q：基礎学力の保証の為、何が求められるか。

A：導入、展開、まとめ、での3つの押さえが要る。

Q：書き順について。

A：書き順は書かれたものが正しければ良いのだが、教師の書き順はしっかりしないと、子どもを混乱させてしまう。

講座概要

所属(教育研修課)

名前(今井 清恵)

■講座名 算数科を通した教科指導
■獲得させたいコンピテンシー(資質・能力) ・教科における指導の基本を理解する力
■本講座の内容 ○算数科の指導について ・1時間の授業構想 ・ねらいや評価規準の設定 ・課題提示の構想
■インターンシップで学んでほしい内容 ・ねらいや評価規準を、学級担任(教科担当)がどのように設定しているか。 ・学ぶ必然を感じさせたり、学ぶ意欲を引き出したりするために、学級担任(教科担当)がどのように工夫しているか。
■大学側の準備 <input type="checkbox"/> プロジェクタ <input type="checkbox"/> スクリーン <input type="checkbox"/> 黒板もしくはホワイトボード <input type="checkbox"/> 講座レジメ(添付ファイル) <input type="checkbox"/> 補助資料(添付ファイル) * パソコン、ポインターは持参します。

第2章⑨ 学校インターンシップに係る岐阜県教委講座

2015.7.30「学校行事の実際：学校行事の位置付けとその価値」多田仁指導主事
(龍崎 記)

本日のねらいとする資質・能力

- ・体験活動の充実ではぐくまれる力の理解
- ・集団活動の意義を踏まえ、指導を工夫する力
- ・学校行事における安全管理・安全指導を進める力

講義の内容

- ・学習指導要領の趣旨の理解
- ・体験活動の充実ではぐくまれる力
- ・児童生徒一人一人や集団が成長する行事の取組
- ・学校行事における安全管理・安全指導
- ・なすことによって学ぶ

考察・交流してみましよう

スライド資料「S君、ばんざい」をもとに

「S君は何を学んだのだろうか」

*児童生徒が「なすことによって学ぶ」ことを教師としてどのように意味づけるか

学習指導要領の趣旨の理解

小学校と中学校の相違点

学校行事の目標と内容の確認

体験活動の充実ではぐくまれる力

直接体験・間接体験・疑似体験

*体験活動の多い子どもほど感心も能力も伸びていく

児童生徒一人一人や集団が成長する行事の取組

集団指導・個別指導

*成長を促す指導・予防的な指導・課題解決的な指導

*特別活動（学校行事）は生徒指導にとって重要な教育活動の場

・「自己存在感」を与える取組として

・相互の「共感的な人間関係」を育てる取組として

・「自己決定」の機会を与える自己実現の喜びを味わわせる取組として

指導のサイクルをPDCAとして活かす

*価値付け、意味付け、方向付け

特別活動の評価の観点

*活動の過程にこそ学びがあり、価値ある姿を褒め、認め、励ます指導

学校行事における安全指導・安全管理

イラスト(運動会前の校庭の様子)から、「どのような危険が想定されるでしょう？」

児童生徒の安全確保、健康・衛生等の管理

施設や設備、使用する機器の安全管理

「事故発生時対応マニュアル」の作成

地域の協力も得ながら指導体制を整え、事故防止に万全を期す

* 事故が起きれば活動を中止する

なすことによって学ぶ

成長を促す指導のために

* 指導要領『解説』での「なすことによって学ぶ」

日常生活につなぐ指導を

- ・ 行事の頑張りを賞賛し、学級生活のどこで生きるかについて考えさせる
- ・ 多くの教師の目を見て価値づけ、期待を伝える
- ・ 学級内で体験の共有化を図る
- ・ 生き生きとした姿を保護者に伝える
- ・ 活動の様子の写真や感想文を掲示し、互いのよさや頑張りに気づくよう促す

* 山本五十六「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人は動かじ。」の続きが大切、「話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず。やっている、姿を感謝で見守って、信頼せねば、人は実らず。」

講座概要

ご所属(教育研修課)

お名前(多田 仁)

■講座名「学校行事の実際」

■獲得させたいコンピテンシー(資質・能力)

- ・体験活動の充実ではぐくまれる力の理解
- ・集団活動の意義を踏まえ、指導を工夫する力
- ・学校行事における安全管理・安全指導を進める力

■本講座の内容

※コンピテンシーを獲得するために、どういった講義を行うかをご記入ください。

- 学習指導要領の趣旨の理解
特別活動(学校行事)
 - ・目標及び内容
- 体験活動の充実ではぐくまれる力
 - ・心に残っている学校行事は
 - ・どのような力が、育まれるのか(各種調査報告資料より)
- 児童生徒一人一人や集団が成長する行事の取組
 - ・具体的な行事の方途
 - ・組織と役割を決めた活動の中でリーダーを育てる工夫
 - ・精一杯取り組んだかつある姿をつかむ工夫
 - ・今後の目標を明らかにする工夫
- 学校行事における安全管理・安全指導
演習 予想される危険とその対策
- なすことによって学ぶ
 - ・望ましい集団活動とは
 - ・公共の精神を養うこと

■インターンシップで学んでほしい内容

学校行事の目標と内容について理解し、集団活動の意義を踏まえ、一人一人の児童生徒の成長を願った学校行事の運営、指導の工夫を進める態度を身に付けてほしいと願っています。また、だれもが楽しく、充実した体験活動が進められるよう、事前からの安全管理・安全指導に対する理解を深めてほしい。

■大学側の準備

- ・プロジェクタ
- ・スクリーン
- ・レーザーポインタ ※パソコンは持参します。
- ・講座資料(添付ファイル)「児童一人一人や集団が大きく成長する行事の取組」
「生徒一人一人や集団が大きく成長する行事の取組」
「特別活動における安全指導」)

第3章 県教委9講座受講アンケート

(1) アンケート項目 (担当 中島)

- ①生活習慣・学習習慣指導
- ②学校の安全
- ③ICT活用
- ④社会人としてのマナー
- ⑤外国語活動支援
- ⑥学級経営の実際
- ⑦児童生徒への特別な支援
- ⑧教科指導
- ⑨行事の実際

(2) アンケートデータ分析 (担当 阿部)

- ・登録者は未登録者より評価が少し厳しい。
 - ・ICT・学校行事の回の出席者数が芳しくない。
(「学校行事」は大学の定期試験中の為、「ICT」あたりは(文科系学生が多数を占める本学の)学生の意識が低い為に思える。)
 - ・5回以上出席している熱心な参加者も1割以上はいる。
 - ・アンケートをよく読んでいない学生およびマークが雑な学生がいる。
(1と4を逆につけている、回答見落としなどが多い)
(マークしろとあるのに○で囲んでいる学生はセンター試験でも同じことをしてきたのか。)
- この節の考察は、第7章(ポートフォリオシステム作成)、第8章(平成28年度の本学「学校インターンシップ」の運営を巡って)に活かされる。

(3) 受講者の感想 (抜粋)

学校インターンシップ講座後アンケート：講座名 基本的な生活習慣・学習習慣の指導 川田 英樹 先生

受講日：2015年__月__日 学科/専修：_____ 学年：__ 男女：__ お名前：_____

※ 学籍番号について、当てはまる数字の〇を鉛筆やボールペンなどで塗りつぶしてください。

Kは1,Gは2	1	2	3	4	5	6	7
①	①	①	①	①	①	①	①
②	①	①	①	①	①	①	①
	②	②	②	②	②	②	②
	③	③	③	③	③	③	③
	④	④	④	④	④	④	④
	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤
	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥
	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦
	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧
	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨

学校インターンシップ登録の有無

有は1、無は2	①	②
---------	---	---

今日の講座で得たものについて、当てはまる数字の〇1つを、鉛筆やボールペンなどで塗りつぶしてください。

	とてもいい 1	いい 2	まあまあ 3	あまりいい 4
1. 今日の講座を受けて自分にとってとても良かったと思う	①	②	③	④
2. 他の講座も受けたいと思う	①	②	③	④
3. 学校インターンシップで学校に行ったときに、今日の講座で得たことを実際に生かしたいと思う	①	②	③	④
4. 基本的な生活習慣・学習習慣とは何かについて理解できた	①	②	③	④
5. 生活習慣・学習習慣の確立の意義について理解できた	①	②	③	④
6. 生活習慣・学習習慣と学力との関係について理解できた	①	②	③	④
7. 生活習慣・学習習慣における児童生徒の実態を的確に把握する力が身についた	①	②	③	④
8. 児童生徒に生活習慣・学習習慣を身に付けるために指導を工夫する力が身についた	①	②	③	④

感想欄：しっかり埋めて下さい：

学校インターンシップ講座後アンケート：講座名 学校の安全 伊藤 直輝 先生

受講日：2015年__月__日 学科/専修：_____ 学年：__ 男女：__ お名前：_____

※ 学籍番号について、当てはまる数字の〇を鉛筆やボールペンなどで塗りつぶしてください。

Kは1,Gは2	1	2	3	4	5	6	7
①	①	①	①	①	①	①	①
②	①	①	①	①	①	①	①
	②	②	②	②	②	②	②
	③	③	③	③	③	③	③
	④	④	④	④	④	④	④
	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤
	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥
	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦
	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧
	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨

学校インターンシップ登録の有無

有は1、無は2	①	②
---------	---	---

今日の講座で得たものについて、当てはまる数字の〇1つを、鉛筆やボールペンなどで塗りつぶしてください。

- | | なるほど
思いました | 少し
思いました | かなり
思いました | とても
思いました |
|---|---------------|-------------|--------------|--------------|
| 1. 今日の講座を受けて自分にとってとても良かったと思う | ① | ② | ③ | ④ |
| 2. 他の講座も受けたいと思う | ① | ② | ③ | ④ |
| 3. 学校インターンシップで学校に行ったときに、今日の講座で得たことを実際に生かしたいと思う | ① | ② | ③ | ④ |
| 4. 学校安全の重要性を理解できた | ① | ② | ③ | ④ |
| 5. 学校インターンシップや教育実習において「学校の安全」に関わって、徹底しなければならぬことを理解できた | ① | ② | ③ | ④ |
| 6. 学校の安全に関わる事案に対応する力が身についた | ① | ② | ③ | ④ |
| 7. 学校における安全指導について、指導方法を工夫する力が身についた | ① | ② | ③ | ④ |

感想欄：しっかり埋めて下さい：

学校インターンシップ講座後アンケート：講座名 ICT 活用(電子黒板など) 松田 義彦 先生

受講日：2015年__月__日 学科/専修：_____ 学年：__ 男女：__ お名前：_____

※ 学籍番号について、当てはまる数字の〇を鉛筆やボールペンなどで塗りつぶしてください。

Kは1,Gは2	1	2	3	4	5	6	7
①	①	①	①	①	①	①	①
②	①	①	①	①	①	①	①
	②	②	②	②	②	②	②
	③	③	③	③	③	③	③
	④	④	④	④	④	④	④
	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤
	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥
	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦
	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧
	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨

学校インターンシップ登録の有無

有は1、無は2	①	②
---------	---	---

今日の講座で得たものについて、当てはまる数字の〇1つを、鉛筆やボールペンなどで塗りつぶしてください。

	とても いいです	いいです	まあ いいです	あまり いいです ありません
1. 今日の講座を受けて自分にとってとても良かったと思う	①	②	③	④
2. 他の講座も受けたと思う	①	②	③	④
3. 学校インターンシップで学校に行ったときに、今日の講座で得たことを実際に生かしたいと思う	①	②	③	④
4. ICT 機器の活用に関する今日的課題について理解できた	①	②	③	④
5. ICT 機器の具体的な活用例を理解できた	①	②	③	④
6. 子どもの実態応じて、ICT を活用しながら指導する力が身についた	①	②	③	④
7. 子どもの学習意欲を喚起し、学習内容の理解と定着を図る指導を工夫する力が身についた	①	②	③	④

感想欄：しっかり埋めて下さい：

学校インターンシップ講座後アンケート：講座名 社会人としてのマナー 大平 和子 先生

受講日：2015年__月__日 学科/専修：_____ 学年：__ 男女：__ お名前：_____

※ 学籍番号について、当てはまる数字の〇を鉛筆やボールペンなどで塗りつぶしてください。

Kは1,Gは2	1	2	3	4	5	6	7
①	①	①	①	①	①	①	①
②	①	①	①	①	①	①	①
	②	②	②	②	②	②	②
	③	③	③	③	③	③	③
	④	④	④	④	④	④	④
	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤
	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥
	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦
	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧
	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨

学校インターンシップ登録の有無

有は1、無は2	①	②
---------	---	---

今日の講座で得たものについて、当てはまる数字の〇1つを、鉛筆やボールペンなどで塗りつぶしてください。

	とても良かった	良かった	かたがた良かった	少し良かった
1. 今日の講座を受けて自分にとってとても良かったと思う	①	②	③	④
2. 他の講座も受けたいと思う	①	②	③	④
3. 学校インターンシップで学校に行ったときに、今日の講座で得たことを実際に生かしたいと思う	①	②	③	④
4. 社会集団のなかでのマナーについて理解できた	①	②	③	④
5. 自分を成長させ、学校や地域を変えるマナーについて理解できた	①	②	③	④
6. マナーの重要性を考える力が身についた	①	②	③	④
7. 様々な場面での適切なマナーを考える力が身についた	①	②	③	④

感想欄：しっかり埋めて下さい：

学校インターンシップ講座後アンケート：講座名 外国語活動支援 中村 行雄 先生

受講日：2015年__月__日 学科/専修：_____ 学年：__ 男女：__ お名前：_____

※ 学籍番号について、当てはまる数字の〇を鉛筆やボールペンなどで塗りつぶしてください。

Kは1,Gは2	1	2	3	4	5	6	7
①	①	①	①	①	①	①	①
②	①	①	①	①	①	①	①
	②	②	②	②	②	②	②
	③	③	③	③	③	③	③
	④	④	④	④	④	④	④
	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤
	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥
	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦
	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧
	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨

学校インターンシップ登録の有無

有は1、無は2	①	②
---------	---	---

今日の講座で得たものについて、当てはまる数字の〇1つを、鉛筆やボールペンなどで塗りつぶしてください。

- | | なるほど
なりました | いい感じ
です | かなり
いい感じ
です | とても
いい感じ
です |
|--|---------------|------------|-------------------|-------------------|
| 1. 今日の講座を受けて自分にとってとても良かったと思う | ① | ② | ③ | ④ |
| 2. 他の講座も受けたいと思う | ① | ② | ③ | ④ |
| 3. 学校インターンシップで学校に行ったときに、今日の講座で得たことを実際に生かしたいと思う | ① | ② | ③ | ④ |
| 4. 児童のコミュニケーション能力の素地を評価するための視点について理解できた | ① | ② | ③ | ④ |
| 5. 学習指導要領における外国語活動の目標と取り扱う内容について理解できた | ① | ② | ③ | ④ |
| 6. コミュニケーション能力の素地を養うための指導について工夫する力が身についた | ① | ② | ③ | ④ |
| 7. 児童の実態に応じてHi, friends!を活用しながら指導する力が身についた | ① | ② | ③ | ④ |
| 8. 児童がコミュニケーションを楽しむことができる活動を工夫する力が身についた | ① | ② | ③ | ④ |

感想欄：しっかり埋めて下さい：

学校インターンシップ講座後アンケート：講座名 学級経営の実際 横山 真一 先生

受講日：2015年__月__日 学科/専修：_____ 学年：__ 男女：__ お名前：_____

※ 学籍番号について、当てはまる数字の〇を鉛筆やボールペンなどで塗りつぶしてください。

Kは1,Gは2	1	2	3	4	5	6	7
①	①	①	①	①	①	①	①
②	①	①	①	①	①	①	①
	②	②	②	②	②	②	②
	③	③	③	③	③	③	③
	④	④	④	④	④	④	④
	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤
	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥
	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦
	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧
	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨

学校インターンシップ登録の有無

有は1、無は2	①	②
---------	---	---

今日の講座で得たものについて、当てはまる数字の〇1つを、鉛筆やボールペンなどで塗りつぶしてください。

- | | なるほど
思いました | いい
思いました | かならず
思いました | とても
思いました |
|--|---------------|-------------|---------------|--------------|
| 1. 今日の講座を受けて自分にとってとても良かったと思う | ① | ② | ③ | ④ |
| 2. 他の講座も受けたいと思う | ① | ② | ③ | ④ |
| 3. 学校インターンシップで学校に行ったときに、今日の講座で得たことを実際に生かしたいと思う | ① | ② | ③ | ④ |
| 4. 学級経営の仕組みを理解できた | ① | ② | ③ | ④ |
| 5. よりよい人間関係を築くための「しかけ」について理解できた | ① | ② | ③ | ④ |
| 6. 個別指導と集団指導を使い分ける力が身についた | ① | ② | ③ | ④ |
| 7. 集団性を高める指導力が身についた | ① | ② | ③ | ④ |
| 8. 学級経営力を身につけるために今からやれることを実行したいと思う | ① | ② | ③ | ④ |

感想欄：しっかり埋めて下さい：

学校インターンシップ講座後アンケート：講座名 特別支援を必要とする児童・生徒への対応 篠田 裕之 先生

受講日：2015年__月__日 学科/専修：_____ 学年：__ 男女：__ お名前：_____

※ 学籍番号について、当てはまる数字の〇を鉛筆やボールペンなどで塗りつぶしてください。

Kは1,Gは2	1	2	3	4	5	6	7
①	①	①	①	①	①	①	①
②	①	①	①	①	①	①	①
	②	②	②	②	②	②	②
	③	③	③	③	③	③	③
	④	④	④	④	④	④	④
	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤
	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥
	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦
	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧
	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨

学校インターンシップ登録の有無

有は1、無は2	①	②
---------	---	---

今日の講座で得たものについて、当てはまる数字の〇1つを、鉛筆やボールペンなどで塗りつぶしてください。

	とても いいです	いいです	まあ いいです	いい です
1. 今日の講座を受けて自分にとってとても良かったと思う	①	②	③	④
2. 他の講座も受けたと思う	①	②	③	④
3. 学校インターンシップで学校に行ったときに、今日の講座で得たことを実際に生かしたいと思う	①	②	③	④
4. 発達障がいについて正しく理解できた	①	②	③	④
5. 発達障がいのある児童生徒への支援について具体的な支援方法が理解できた	①	②	③	④
6. 発達障がいを正しく理解しようとする力が身についた	①	②	③	④
7. 児童・生徒の実態を理解しようとする力が身についた	①	②	③	④

感想欄：しっかり埋めて下さい：

学校インターンシップ講座後アンケート：講座名 算数科を通した教科指導 今井 清恵 先生

受講日：2015年__月__日 学科/専修：_____ 学年：__ 男女：__ お名前：_____

※ 学籍番号について、当てはまる数字の○を鉛筆やボールペンなどで塗りつぶしてください。

Kは1,Gは2	1	2	3	4	5	6	7
①	①	①	①	①	①	①	①
②	①	①	①	①	①	①	①
	②	②	②	②	②	②	②
	③	③	③	③	③	③	③
	④	④	④	④	④	④	④
	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤
	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥
	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦
	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧
	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨

学校インターンシップ登録の有無

有は1、無は2	①	②
---------	---	---

今日の講座で得たものについて、当てはまる数字の○1つを、鉛筆やボールペンなどで塗りつぶしてください。

	とてもいい	いい	まあまあ	あまりいい
1. 今日の講座を受けて自分にとってとても良かったと思う	①	②	③	④
2. 他の講座も受けたと思う	①	②	③	④
3. 学校インターンシップで学校に行ったときに、今日の講座で得たことを実際に生かしたいと思う	①	②	③	④
4. 1時間の授業を構想するに当たり重要な事項について理解できた	①	②	③	④
5. 授業のねらいや評価基準の設定について理解できた	①	②	③	④
6. 課題提示を構想するときの工夫について理解できた	①	②	③	④
7. 教科における指導の基本を理解する力が身についた	①	②	③	④
8. 1時間の授業を構想する力が身についた	①	②	③	④

感想欄：しっかり埋めて下さい：

学校インターンシップ講座後アンケート：講座名 学校行事の実際 多田 仁 先生

受講日：2015年__月__日 学科/専修：_____ 学年：__ 男女：__ お名前：_____

※ 学籍番号について、当てはまる数字の〇を鉛筆やボールペンなどで塗りつぶしてください。

Kは1,Gは2	1	2	3	4	5	6	7
①	①	①	①	①	①	①	①
②	①	①	①	①	①	①	①
	②	②	②	②	②	②	②
	③	③	③	③	③	③	③
	④	④	④	④	④	④	④
	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤
	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥
	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦
	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧
	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨

学校インターンシップ登録の有無

有は1、無は2	①	②
---------	---	---

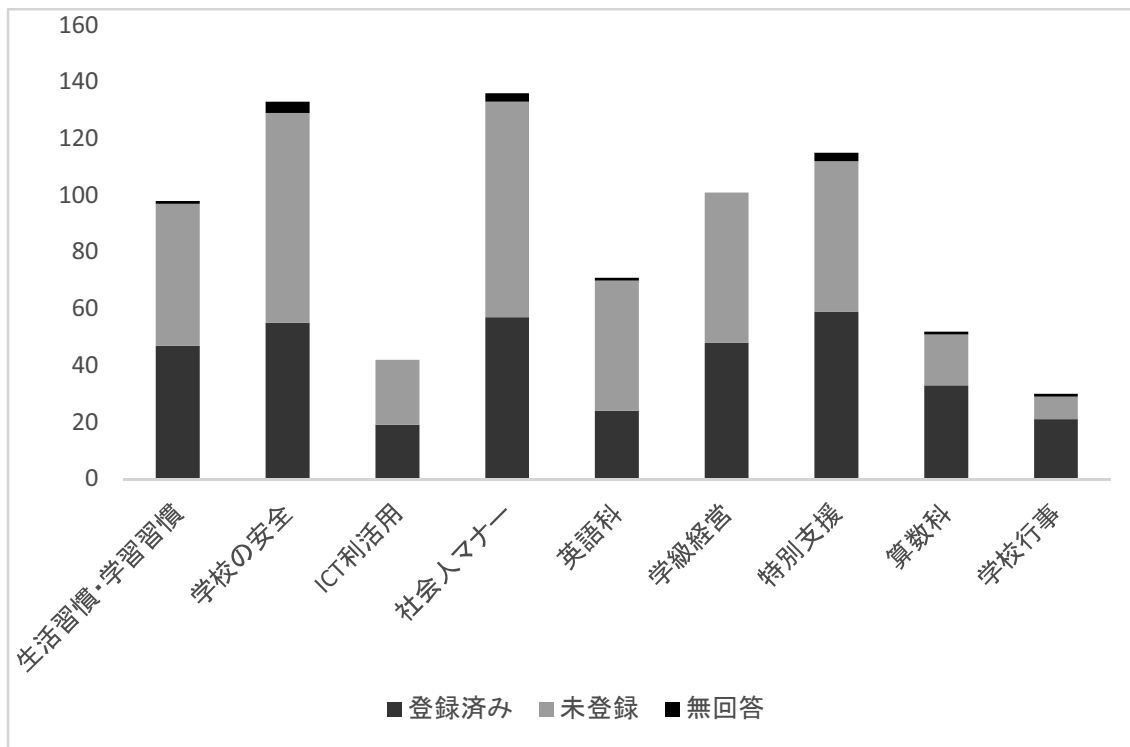
今日の講座で得たものについて、当てはまる数字の〇1つを、鉛筆やボールペンなどで塗りつぶしてください。

	なるほど なりました	うなづいて きました	か んじました	あ らうと思いました
1. 今日の講座を受けて自分にとってとても良かったと思う	①	②	③	④
2. 学校インターンシップで学校に行ったときに、今日の講座で得たことを実際に生かしたいと思う	①	②	③	④
3. 学校行事に関する学習指導要領の趣旨について理解できた	①	②	③	④
4. 体験活動の充実ではぐくまれる力について理解できた	①	②	③	④
5. 児童生徒一人一人や集団が成長する行事の取組の工夫について理解できた	①	②	③	④
6. 集団活動の意義を踏まえ、指導を工夫する力が身についた	①	②	③	④
7. 学校行事における安全管理・安全指導を進める力が身についた	①	②	③	④

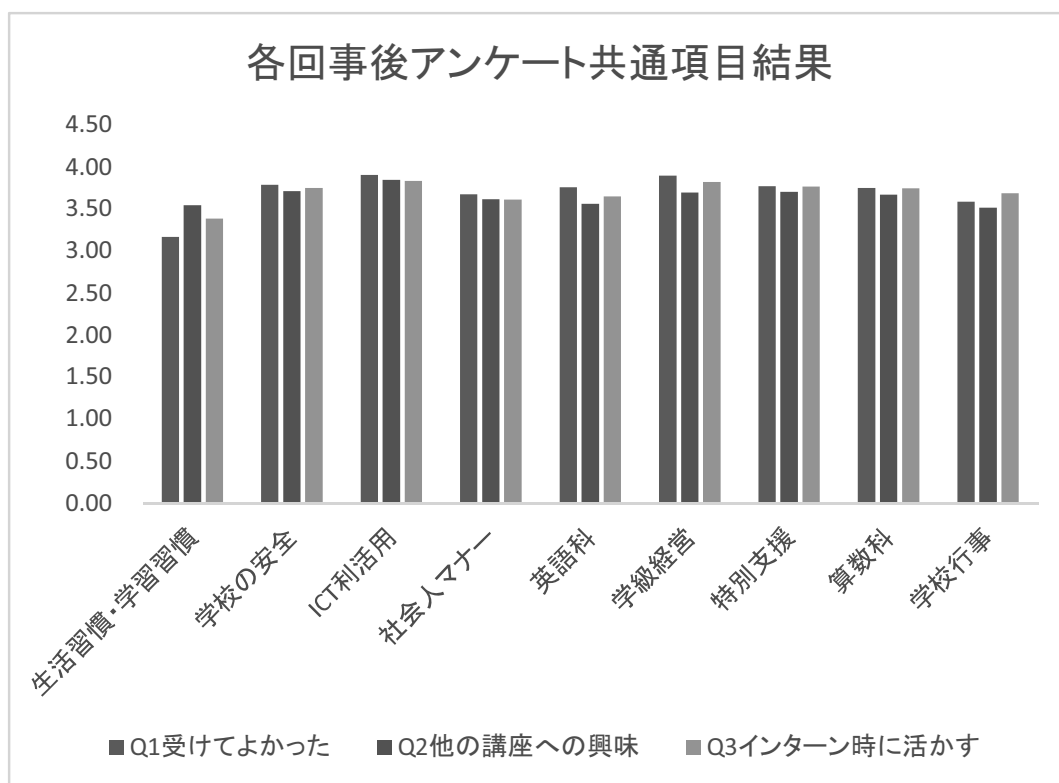
感想欄：しっかり埋めて下さい：

2015県教委講座受講アンケート分析(岐阜聖徳学園)

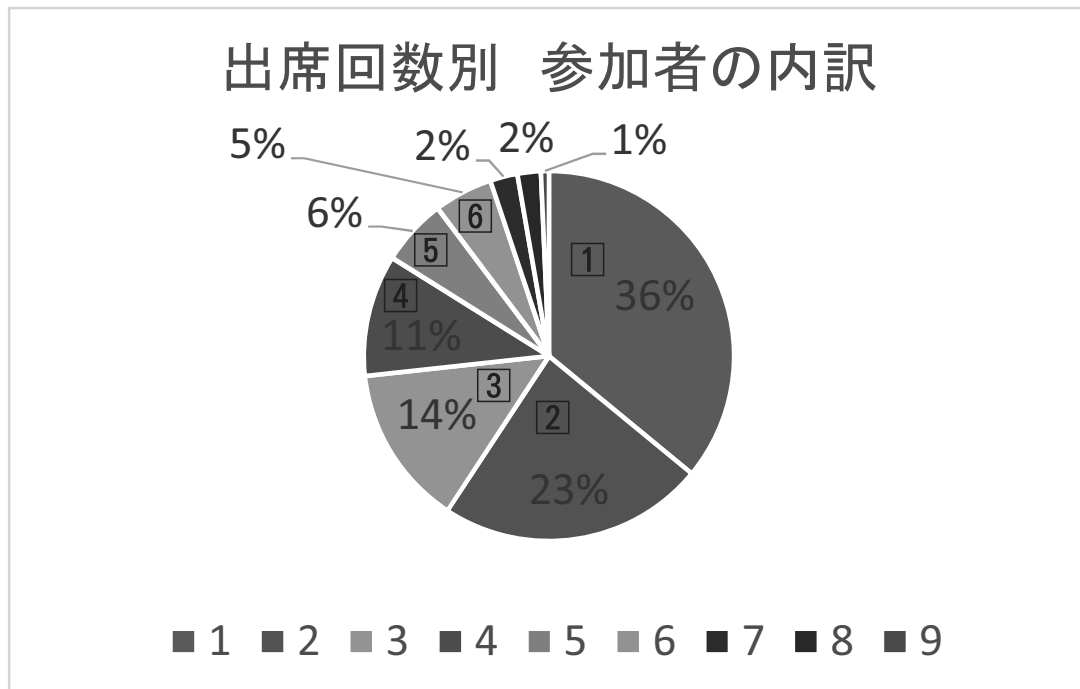
出席者数	登録済み	未登録	無回答	全体
6月30日 生活習慣・学習習慣	47	50	1	98
7月8日 学校の安全	55	74	4	133
7月14日 ICT利活用	19	23	0	42
7月15日 社会人マナー	57	76	3	136
7月16日 英語科	24	46	1	71
7月22日 学級経営	48	53	0	101
7月23日 特別支援	59	53	3	115
7月27日 算数科	33	18	1	52
7月30日 学校行事	21	8	1	30



事後評価共通項目	Q1受けてよ かった	Q2他の講座へ の興味	Q3インターン時 に活かす
生活習慣・学習習慣	3.17	3.55	3.38
学校の安全	3.79	3.71	3.75
ICT利活用	3.91	3.85	3.83
社会人マナー	3.68	3.62	3.61
英語科	3.76	3.56	3.65
学級経営	3.90	3.70	3.82
特別支援	3.77	3.70	3.77
算数科	3.75	3.67	3.75
学校行事	3.59	3.52	3.69



出席回数	人数	パーセンテージ
1	105	36.0%
2	68	23.3%
3	41	14.0%
4	31	10.6%
5	17	5.8%
6	15	5.1%
7	7	2.4%
8	6	2.1%
9	2	0.7%
合計	292	100.0%



平成 27 年度 (2015 年度)

インターンシップに係る岐阜県教委講座 (岐阜聖徳学園大学)

より

受講学生の感想の抜粋 (1 割程度)

生活習慣と学習習慣(2015.6.30) (川田先生)

・具体的な図や写真などを使って分かりやすく説明してくださり、生活習慣や学習習慣がきちんとしている児童や生徒が学力においても良い成績を収めていることを理解した。

・子ども達の成長の中には生活習慣と学習習慣が深く関わっているので、子ども達が習慣にできるように、小さな変化を見逃さなかったり、ほめてあげる等を通してやる気を育てて続けてもらえるようにしたいです。この講義では、具体的な指導法や声かけ等を教えて下さり9月からの実習に生かしたいと強く思いました。

・今日の講義を聴いて改めて教員になりたいと強く思った。子どもたちの成長を近くで見守り、指導をして「この先生に出会えてよかった」と言ってもらえるようになりたいと思った。そのためには褒め方や叱り方を工夫することや小さな変化を見逃さないことが大切だと学んだ。教員になるためにはまずは試験勉強を頑張り合格したい。

・私は去年実習で授業をする際、内容を理解させることばかり考え、学習習慣等の指導が特に中学校ではできていなかったと思い出し、反省しました。小学校では2年生ということもあって、話す人におへそ向けて聞こうね、などの言い方で指導もできたと思います。

・実際に現場にたずさわっていた先生の話聞く機会が持てて、本当によかったです。子どもたちの学力の定着や豊かな学校生活を送っていくためには生活習慣や学習習慣が重要であることが理解できました。さらに、実際の身につけ方や指導の仕方についても詳しく教えていただいて、とてもためになりました。

・教育実習を終えてからの話だったので想像しやすく、分かりやすかったです。「やる気を出せ！」など何気なく出てしまいそうな言葉だけれど、「やる気を育てる」この気持ちで子どもと関わりたいと思いました。

・90分という時間でもとても短く感じる位、実践の場での様子も含めてとても分かりやすく、また楽しい講義でした。私はボランティア等で子どもと接する中で叱ることも大切であるが、ほめることで自分を認めてもらいたいという思いからほめるようにしていました。しかし、ほめ方が実際、意図的になってしまっていて、自分が感動したこととなっていない感でした。今後、いい所をみつけタイミングをつかんで言葉掛けをすることで子どものやる気を引き出せる教師になりたいです。

・インターンで学校に行った時、現場の先生も学習習慣や生活習慣の徹底には気を配ってみえた事を思い出し、自分も教員になったら今日学んだ指導法をもとに指導したいと思います。

・やる気を育てるのときの「小さな変化を見逃さない」ことや「その場で認める」ということは本当にその通りだと思ったので気をつけていきたいです。「コメント力をつける」というところは考えたことがなかったので身につけていきたいと思いました。

・ほめる時に、手をあげたことだけでなく、手をあげようとした子にもほめるというのを聞いて、結果を見るだけでなく、1人1人の人前での慣れなどもあると思うのでその子のものさしで少しの変化を気付くのが大切なのだなと思いました。

学校の安全(2015.7.8) (伊藤先生)

・水難事故や熱中症を防ぐために、具体的に何をすべきかしっかり考えられました。また、仲間の意見を聞いて想像もできなかつた対策方法がいくつもあり、自分はまだまだと痛感しました。『生命を守る訓練』という名前の変更には、子どもに自分で判断させるという思いがあると知りました。

・私は理科の教師を目指しているので理科の実験について深くとらえ、準備していく重要性を身にしみて感じた。実験の楽しさも一瞬で命の危険をおびやかすくらい事故が起これるかもしれないと思うと今のような軽い考えではだめだと思った。

・中学校2年生の女の子についてのお話にとっても深く考えさせられました。

・命の大切さをどう子どもに伝えたら良いか分かりませんが、先生の冒頭のお話や熱意のある指導で命の大切さを身にしみて感じました。本当にあなたの命は大切だ、と感じられるお話でした。

・「想定外だったから...。」とならないために、常に最悪のケースを想定して、子どもの安全を考え、子どもの命を守りたいです。

・本日の講義を受けて、なぜ安全指導をするのか？＝命を守るため、ということがはっきりと分かりました。そして私自身が学生という立場ではなく、教員という立場で考えることが大切だと思います。

・常に危険なところはないかと、想定し、また自分の目で安全を確認することが大切だということが分かりました。そして、まだアナフィラキシーショックや落雷事故に対する知識が少ないので、調べ、学び、いざというときに対応できるようにしておきたいと思いました。

・卒業研究のテーマが「学校における危機管理」なので、今回の講義に参加させていただきました。どのような場面においても、教師が真剣に伝えたいことを伝え続けることが大切であるということが一番印象に残りました。

・グループ討論をすることで自分の安全指導の考えが深まりました。命を大切にすることを指導する力を身につけていきたいです。

・実践的に考えることができたので、すごくよかったです。ちょうど9月の実習は運動会シーズンなので、皆のいろいろな意見を聞けてすごくためになった。実際にありえることなので様々な状況を考える必要があるなと思いました。

・学校安全の責任は、全て教師にあるということを改めて学ぶことができました。

・いくつかのテーマからグループ討議をして感じたのは、たった4人だけでもいくつかの意見が出たので、学校現場で教師が話し合えば安全への意見がたくさん出て、より安全の環境になると思いました。

・伊藤先生のユーモアある講座だと思いました。先生の実際に過去に起こった事件をもとに先生自身がどういう思いで学校の安全の講座を開いてくれたのか、命の大切さ、これからの学校の授業のやり方や、情報の大切さを、教えてもらい楽しくためになる講座だと思

いました。「避難訓練」から「命を守る訓練」へ。

- ・学校の授業ではまだ教職関係の授業がないので、このような講座を受けることができとても良い経験になりました。学校の安全は100%教員にあり、「その場にはいないから」とか「生徒（児童）同士のことだから」とかは関係なく、教員に責任があることがわかりました。

- ・第一に命の大切さ、またそれらの児童生徒への伝え方などを学ぶことができました。グループ討議の際には自分だけではなく、他のグループ、同じグループの人たちの意見、またその思考回路に圧倒されました。

I C T活用(2015.7.14) (松田先生)

・ I C Tを利用した授業が開かれるようになってきている。児童・生徒の学習意欲も黒板だけの授業よりも高いということが分かり、良かったです。

・自分の小学校・中学校時代をふり返っても、あまり I C Tを活用した授業というものを受けて来なかったので、 I C Tを活用した授業を行うことに対して抵抗感のようなものがありました。今日お話を聞いてみて、子どもに分かりやすく伝えるためには必要不可欠とあり教師になるために少しずつ学んで行かないといけないなと思うことができました。

・本日の講義を受けて、 I C Tはやはり動きを出せることが一番の長所ではないかと感じました。

・書画カメラを使うことで、児童がいつも使っている分度器やコンパスを使い、それをみんなで見えることが分かりました。先生用のコンパスや分度器では実習の時、とても児童が使いにくそうだったのでこれはすごくいいなと思いました。

・ I C Tを活用した授業を適切に行うことができると、児童生徒にとって興味関心をもて、深い理解をすることにつながると思いました。 I C Tだけになってしまうのではなく、紙の教科書だからできることや、プリント学習や実際に書き込んでする内容もうまくバランスをとっていきたいです。

社会人としてのマナー (2015.7.15) (大平先生)

- ・マナーは思いやりの心から生まれるということを伺った。
- ・学校集団の中でのマナーについて着目し、ロールプレイやたくさん考えながら講座を受けることができた。
- ・大平先生のお話し方に、今日学んだことばのうつくしさが表れていた。
- ・本日の講義では、スーパーで保護者に会うなどの具体的な場面を想定して、自分がどのように行動するべきかを考えられた。
- ・口だけでマナーを守らなければいけないと言ってでは全然だめと学んだ。先生は子どもたちのお手本であり、もっと自分自身を磨いていかなければいけないと思った。
- ・マナーといったらとても厳しいものをイメージしがちでしたが、本日の講義は、実際に考えることができる場面設定であったり、仮定として生徒に話すということから様々な具体例を考えられた。
- ・マナーとルールは紙一重。マナーであるものもやらなければいけないと感じ義務感が出てくればルールになってしまう。「相手のことを思って行動できるように」と学びました。
- ・最後の美しいマナーは妙薬、特効薬に似ているという部分がとても納得した。
- ・私は、企業就職希望で、マナーについてという内容だったので、今日参加してみました。これが企業だったらいいなど、自分なりに考えて、グループワークなどに参加しました。
- ・小さい頃から、親にマナーについて厳しく言われてきましたが、それは個人のことばかりで集団については、あまり学んできませんでした。今回のお話で、「マナーは他者を思う気持ちである」と、思いが一杯になりました。
- ・教師として必要な最低限のマナーであり、また最上級の心得を学ぶことができた。人間としての美しさは内面からにじみ出るものという言葉が心に残りました。
- ・私なりにマナーというのは人と人のつながり・信頼関係なんだと気付くことができました。他人にもマナーの大切さを言えることの大切さを理解し、それを言えるようにしていきます。
- ・教育実習でこんなときにどうするのか考えられて、これから行くので、不安が少し解消されました。マナーとは、身だしなみや会釈の仕方、歩き方等もあるけれど、一番大切なことはその人を想って行動することだということを学びました。
- ・子どもたちにも、「〇〇さん、スリッパそろえていてとても良かったよ。ありがとう。」など、心の大切さを日々の中で教えることができたなら良いと思いました。
- ・学校が美しくあるためにも学校の顔である教師一人一人がマナーについて考え、誰かに強要されるのではなく、自分から動くことのできる人間でありたいと思いました。これからのインターンシップやボランティア、教育現場でも思いやりの心を大切に、誰からにも恥じない姿を示していきたいと思います。
- ・初めに、問題を3つほど提示され、それについて考えることはすごくおもしろかったです。特に、電話やスーパーで保護者に会ったときの対応が、すぐにすらすらと言えたと

ころは素晴らしいと思いました。私だったら、そんな風には言えません。今日習ったマナーはぜひ教育実習で実践していきたいです。

- ・最後の質問で、教師の言葉遣いについて、どのくらいタメ口でいいのかという話が、個人的な疑問だったのでとても意味のある講座になりました。

- ・私は電話対応がとても不安なので色々な状況や場面などを想像していきたいなあと思いました。内面の美しさは形にならないと目に見えないという言葉が印象的でした。

外国語活動支援(2015.7.16) (中村先生)

・私は外国語学部で小学校免許も取っているので外国語活動や英語の授業に必ず関わるので、今回、この講座をうけて、どのように工夫して授業をしたら子どもたちが楽しく英語を学べるかということをお教えいただけるととてもためになりました。子どもたちが楽しくコミュニケーションができるよう工夫した授業をしたいと思いました。

・今日の講座をうけて、小学生を相手に英語の授業をする際には、正しさよりも、慣れしただけが大切で、楽しい授業をすることが大切になってくるのが分かりました。子どもたちにコミュニケーション能力の素地を養うために、今日お教えいただいた、チャンツやゲームを取り入れるなどして、子どもたちに楽しんでもらえてさらに素地を養える授業を展開できるようになりたいと思いました。

・これから2020のオリンピックに向けてより英語活動がさかんになっていく。英語力を高めようとするあまり、難しい発音や正確な文字にこだわるとせっかくの楽しい英語が台無しになるばかりでなく、英語を嫌になる子がでてきてコミュニケーションの「素地」が養うことができるかもしれません。あせらずじっくりとりくんでいく必要がある教育内容だと感じました。

・私は教育学部の英語専修で、近頃の英語の教育の問題等をよく耳にします。特に小学校の教科の英語教育の導入は私も興味を持っていたので、今回中村先生の講義を聞かせていただいたことによって、どのように子どもたちに楽しくコミュニケーションをとる活動をするかということがかめたい感じがします。

・小学校の外国語活動は発音の正確さを求めず、英語に慣れしただけながら英語を楽しむことが分かりました。私は、教育実習で英語を教える立場になるので中学校での発音の正確さについて今日から直していきたいなと思いました。

・教育実習で何回か外国語活動を持たせてもらいましたが、「体験的に」「コミュニケーションを図ろうとする」「基本的な表現への慣れ親しみ」などコミュニケーションに必要な素地を養うための観点をふまえて授業ができたかと言われたら自信がありません。実習に行く前にこの講座が受けれたらと思いました。

・私は専門が国語なので英語にあまり自信がなく教師になってから不安に思っていたが、児童と一緒に楽しく学びながら行えばいいと知って気が楽になった。

・体験的で、楽しい授業でした。

学級経営(2015.7.22) (横山先生)

・生徒指導には、つい集団をよくするための言葉になりがちではありますが、根本の考え方にかえり、その本人を思う気持ちを一番に考えられるようになりたいと思いました。

・指導するのに必要不可欠なのは信頼関係だということを改めて感じました。規律はとても大切だが、ただ規律規律で子どもを動かしてはいけないなと思いました。全員が納得する規律や信頼関係を築いた上で創る規律、私が担任の先生になった時、考えて実行していきたいと強く思います。

・一番に感じたことは、学級経営には「規律」と「信頼関係」のバランス、そして、それを行う時期が大切だと分かりました。しかも、子ども同士の規律を作り出せることが一番重要ではないかと思えます。

・①集団に軸足を置かない②姿ではなく心を求める③判断は子ども達に委ねること④集団と個にそれぞれ目を向けること⑤規律と信頼関係の及ぼす影響を知ること、など様々なポイントを理解することができました。今日の講義は正に、私にとっての金科玉条となりました。

・教育実習で先生の学級経営のすごさに感動して「こんな先生になりたい!!」と強く思ったのですが今日、その根拠がとてもよく分かりました。先生はうまく規律と信頼のバランスをとって、発達段階も加味しながら学級経営をされていたからです!!「個を大切に、個をのばす」ということを念頭において情熱、理解、表現、関係を大切にしていきたいと思えます。

・学級経営をするために、すごく熱心に話してくれて、さらに実際にみんなだったらどうするかなどのロールプレイをしたことによって、学級経営の難しさ、そして楽しさなどを感じることができました。1時間半という時間が本当にあつという間ですごく充実した時間でした。

・教師は子ども1人1人ときちんと向き合いその子の考えや気持ちを理解してあげることが大切であることがすごく心に残りました。今日学んだことを生かして教育実習で学級経営についてたくさん学んでいきたいです。学級経営といじめの関係も深いのではないかと考えた。

・私はまだ3年生なのでこれから実習に行くのですが何よりも学級経営についてとても興味がありました。私たちが実習でお世話になるころは、もうすでに学級ができ上がっているかもしれませんが、自分が将来担任を持つときに今日の講義内容を忘れずにいたいです。

・とても勉強になりました。ロールプレイで自分が至らなかった点がわかり1人1人を愛することが大切であると分かりました。とてもすてきな講義でした。この心がまえをもって、自分も実習に挑んでいくものでいこうと思いました。

・私は教育実習に行った時、生活ノートにコメントを書かせていただく機会がありました。その時、感じたのは生活ノートにコメントを書くことで話したことの無い子どもとも信頼関係が繋いでいけるということです。小さな関わりも大切に、どの子どもも大切にしたい学級経営を

していける教師になりたいと思いました。

・自分に一番ひびいた言葉は「クラス」という集団づくりは「手段」でしかないということ。何を教師はしなくてはいけない事なのか考える必要があると思った。クラスの1人、ではなく常に個人として見ようと思った。

特別支援(2015.7.23)(篠田先生)

- ・発達障がい克服することは難しいが、発達課題を解決することはできるとわかった。他の人より、少し時間がかかるだけであり、その子の特性に合わせて支援や援助を施すことの大切さを改めて感じた。
- ・子どもの行動の背景にあるものを考え、知り、支援することを大切にしていきたいです。
- ・私は特支学校の教員を目指しています。ボランティアなどで、障がいのある子どもたちと接する機会が多くありますが、まだまだわからないことも多くあります。今日の講義を聞いて、障がいに対する理解や対処の仕方など、今まで知らなかったことをたくさん知ることができて、とても有難い講義となりました。
- ・私が昨年教育実習に行った際、ADHDの傾向がある子に対して、落ち着きがないことについて強めに注意してしまいました。その子は「自分でもわかっているけど動いてしまう」とその子の苦しんでいることを涙目になりながら話していました。その子が苦しんでいることをさらに叱ってしまうことでその子の自信を失わせてしまうことが分かり、自分がした行為がよくないことがよく分かりました。
- ・介護等体験やボランティア体験を通して、特別支援に興味を持ち始め、特別支援教育のことを勉強し始めました。発達障がいの種類や浅い内容は分かるのですが、指導方法のことはよく分からなかったのがためになりました。改めて、1人1人の障がいの状態、一人一人の児童を理解して、指導方法を工夫していくことが大事ということが分かりました。
- ・今はクラスに2～3人発達障がいがある子がいると分かりました。一人一人症状はちがうので、しっかりその子をよく見て実態を把握して関わるのが大切だと分かりました。誰に対しても見通しをもった指導が必要だと思います。障がいがより悪化しないようによりよく生活できるように接していきたいと思いました。
- ・私も教育実習のとき気に入らないことがあると自分の腕を噛んでしまう子がいました。その子は何が気に入らないのかということをごちらがわかったとき噛むことを未然に防ぐことができました。これからも「なぜ」を大切にしていきたいです。
- ・特別な支援を必要とする子どもたちも大切に教育しなければならないと感じた。得意なことをのばし、苦手なことは少しでも成長したことを認め、どんどんほめていきたい。そしてその子どもが自信をもって社会に出られるようにその子どもにとっての武器を持たせて送り出していきたい。
- ・私は特支学校に実習に行ったことがありますが、通常学級にいるLD, ADHD, 自閉症スペクトラムなどの子どもを見たことがなく、実習やこれから先不安に思うことばかりでしたが、今日いろいろな言葉がけなどを教えていただいたので、実践できるようにしたいと思います。
- ・私はサークルで発達障がいのある子と関わる事が多く、今日の講義を受けて1人1人の行動の意味や思いを改めて考え直せました。声かけ等、何を言っているかとまどってしまう事もありますが、その子の特徴を考え支援していきたいです。

・なぜ？をしっかりと把握することが大切である。通常学級では障がいのある子にだけ目を配ればいいわけではないので大変だと思いました。特支学校では、各クラス2人担任制だったので、通常学級も2人担任制になるといいと思いました。障がいのある子に分かりやすい授業は、他の子も分かりやすい授業だと思うので、みんなに分かりやすい授業になるように頑張りたいです。

・それぞれの障がいに対して、どのように対応していったらいいかを理解することができた。ボランティアや児童館でのアルバイトなど、子どもと関わる機会があるので、そのときに生かしていきたい。まずはその障がいについてきちんと理解し、その子自身と関わる中で、その子についてきちんと分かってあげたいと思った。

・今度特支学校へ実習に行くこととなりました。今日学んだことは大変ためになると思いました。‘教師’としての立場をいきなり自分がまねようとするのではなく、今日学んだことについていかに現場で実行されているかに注目して貴重な時間を過ごしたいと思いました。

・私は障がいをもつ子どもの理解があまりできていなくて、心理の授業で少し知識があった程度でした。H24の段階で6.5%もクラスに障がいの子がいるとわかって正直どう指導していいか不安だったけど、今日の講義で具体的な方法や考え方がわかったので、10月にある実習で生かしたいです。

・わたしはカジクラブというサークルに今年から入ったのですが、全体の場で皆とはちがう行動をしたり、自分の思っていることを周りを気にせず話をはじめてしまう子どもがいて、どうしてもそういった行動を無理にとめようとして、進行に支障をきたさないようにという意識をもってしまいがちですが、そういったことでいつも叱ったり怒ったりしてしまうことは子どもの自己肯定感を失わせてしまったり、二次障がいをおこしてしまう危険があることがわかりました。

教科指導（算数）（2015. 7. 27）（今井先生）

・私は実習の時に教材研究が甘くて子どもの意見にふり回されてしまうときがありました。今日のお話をきいてやはり教材研究からねらいを明確にもつことが大切であると再確認できてよかったです。算数・数学は苦手意識をもつ子が多く、おもしろくないと思っている子どももいるのが現実です。その原因として教師が「教える」ことに一生懸命で「考えさせる」ことをさせていないことがあると思いました。

・授業の構成としてまずは「ねらいを明確」にすることを大切にすべきだと感じました。今井先生がおっしゃっていた対象・出口・考え・活動を明確にし、9月から教育実習が始まるので、今回の指導方法を活用し、岐阜県総合教育センターも参考にしたいです。

・模擬授業の時に、長方形の紙の下に面積を求めるべき図形が出てきたのは、児童にとって、すごく興味をそそる仕方だなあと感じました。書き順も、児童が将来困らないようにするためには大切なことだなあと感じました。

・実施に導入～課題までの流れを見せて頂き勉強になりました。工夫が沢山されていて、自分も生かしていきたいと思いました。書き順が記号にもあるのも、今日初めて知りました。今後気をつけたいと思います。

・やはり一番はねらいが大切だと思いました。その際に□な活動を通して□に気付き□をできるようにするといったような書き方をすべきということも改めてわかりました。

・授業展開を考えるのではなく、ねらいや評価を明確にしてからにしないといけないことがわかりました。また、少しでも工夫することが子どもの授業への意欲につながるということが分かった。

学校行事(2015.7.30) (多田先生)

・学校行事ということで話を聞き、面白さや楽しさを感じました。目標をしっかりと決め、PDCAというサイクルで行っていく重要性を学びました。事故の重大さ、安全を常に教えておく大切さ、を学びました。安全を大切にして、異年齢集団等でコミュニケーションを取っていく必要性を感じました。

・ラクダの絵では子どもの自由な率直な発想力を改めて感じました。

・学校行事は全体で行うものだけれど、その中でも個人を育てたり、仲間同士で支え合っ
て成長していくことが重要だということが分かりました。

・目標を学校・学級・個人と細かく段階に分けて設定し、必ず活動の過程に焦点をおいて
指導していくことが大切だと分かった。

第4章 小学校教育実習直後アンケート

岐阜県教委講座の成果を本学教育学部のコアカリキュラムの一つである小学校教育実習直後のアンケート（2015年10月）で視る。

平成27年度の文科省調査研究事業「学校インターンシップの改善」で岐阜県教委との連携で出された9つの資質能力に関わり、県教委講座が終了したのちである2015年10月小学校教育実習事後指導で、紙媒体アンケートを採った（ $9 \times 3 = 27$ 項目）。

（1）アンケート項目（担当 高村）

「習慣」「安全」「ICT」「マナー」「英語」「学級」「特支」「教科」「行事」の9講座について各3項目ずつアンケートを採った。

（2）アンケートデータ分析（担当 高村）

そのうち、天井効果が現れていたり、偶然(たまたま)である可能性 p が 0.05 (5パーセント) 以上 ($p > .05$) であったり、参加群の度数が少ないものを除き、 t 値が大きいもので考えると、「安全」1、「英語」1,2,3 が講座出席者に優位性ありと考えられる。

天井が出ているのは、「習慣」2項目、「安全」1項目、「マナー」2項目、「学級」3項目、「特支」1項目、「行事」2項目は、本学学生の持っている熱心さの現れとも見られる。

（3）アンケートデータ総括（担当 高村）

教育実習アンケート

学籍番号

氏名

今回の小学校実習について、以下の項目を読んで最も当てはまる数字に○をつけてください。
 (あてはまらない 1, あまりあてはまらない 2, どちらでもない 3, 少し当てはまる 4, あてはまる 5)

	あてはまらない	あまりあてはまらない	どちらでもない	少しあてはまる	あてはまる
1 児童の生活習慣や学習習慣を把握するように心がけた	1	2	3	4	5
2 児童のやる気を促すような働きかけを心がけた	1	2	3	4	5
3 児童の生活習慣や学習習慣について、将来学級担任として指導していく自信がもてた	1	2	3	4	5
4 実習校での安全に対する取り組みについて理解を深めることを心がけた	1	2	3	4	5
5 児童が学校で安全に生活するために、将来学級担任として指導していく自信がもてた	1	2	3	4	5
6 児童が学校で安全に生活するために学級担任がどのような工夫をしているのかを観察することを心がけた	1	2	3	4	5
7 実習校でのICT機器の活用状況について観察することを心がけた	1	2	3	4	5
8 ICT機器の効果について理解を深めることを心がけた	1	2	3	4	5
9 将来教師としてICT機器を活用していく自信がもてた	1	2	3	4	5
10 社会人としてのマナーを心がけた	1	2	3	4	5
11 学校教育において、マナーの重要性を理解を深めることを心がけた	1	2	3	4	5
12 将来社会人としてのマナーを身につけた教師になる自信がもてた	1	2	3	4	5
13 外国語活動による児童への効果について理解を深めることを心がけた	1	2	3	4	5
14 英語でコミュニケーションを図ることができるように学級担任がどのような工夫をしているのかを観察することを心がけた	1	2	3	4	5

GP委員会アンケート

15	児童に英語のコミュニケーション能力を養うために、将来学級担任として指導していく自信がもてた	1	2	3	4	5
16	担任と子どもたちとの信頼関係を築くために学級担任がどのような工夫をしているのかを観察することを心がけた	1	2	3	4	5
17	子どもたち同志の信頼関係を築くことができるような働きかけを心がけた	1	2	3	4	5
18	将来学級担任として学級運営をしていくにあたり、自分が努力すべきことについて考えた	1	2	3	4	5
19	発達障害の子どもたちについての理解を深めることができた	1	2	3	4	5
20	発達障害の子どもたちに対して積極的に関わろうと心がけた	1	2	3	4	5
21	将来教師として発達障害の子どもたちとの関わることについて自信がもてた	1	2	3	4	5
22	ねらいを明確にし、系統立てた授業計画を立てることを心がけた	1	2	3	4	5
23	設定したねらいについて、子どもたちがしっかりと理解できているかを確認することを心がけた	1	2	3	4	5
24	将来教師として、学ぶ意欲を引き出すような授業を行う自信がもてた	1	2	3	4	5
25	学校行事の意義についての理解を深めることを心がけた	1	2	3	4	5
26	実習校における学校行事の運営や指導の工夫について観察することを心がけた	1	2	3	4	5
27	将来教師として、安全に学校行事を運営することについて自信がもてた	1	2	3	4	5

実習前にもっと学習しておけばよかったことや、身につけておきたかったことがあれば書いてください。

1. 記述統計量

	項目	度数	平均値	SD	
習慣 1	児童の生活習慣や学習習慣を把握するように心がけた	357	4.75	0.50	天井
習慣 2	児童のやる気を促すような働きかけを心がけた	356	4.73	0.47	天井
習慣 3	児童の生活習慣や学習習慣について、将来学級担任として指導していく自信がもてた	356	3.50	0.94	
安全 1	実習校での安全に対する取り組みについて理解を深めることを心がけた	356	4.24	0.74	
安全 2	児童が学校で安全に生活するために、将来学級担任として指導していく自信がもてた	356	3.53	0.91	
安全 3	児童が学校で安全に生活するために学級担任がどのような工夫をしているのかを観察することを心がけた	356	4.46	0.65	天井
ICT1	実習校での ICT 機器の活用状況について観察することを心がけた	357	3.25	1.34	
ICT2	ICT 機器の効果について理解を深めることを心がけた	356	3.13	1.34	
ICT3	将来教師として ICT 機器を活用していく自信がもてた	357	2.71	1.20	
マナー 1	社会人としてのマナーを心がけた	357	4.65	0.57	天井
マナー 2	学校教育において、マナーの重要性を理解を深めることを心がけた	357	4.63	0.58	天井
マナー 3	将来社会人としてのマナーを身につけた教師になる自信がもてた	357	3.89	0.86	
英語 1	外国語活動による児童への効果について理解を深めることを心がけた	357	3.57	1.18	
英語 2	英語でコミュニケーションを図ることができるように学級担任がどのような工夫をしているのかを観察することを心がけた	357	3.51	1.25	
英語 3	児童に英語のコミュニケーション能力を養うために、将来学級担任として指導していく自信がもてた	357	2.96	1.10	
学級 1	担任と子どもたちとの信頼関係を築くために学級担任がどのような工夫をしているのかを観察することを心がけた	357	4.67	0.56	天井
学級 2	子どもたち同志の信頼関係を築くことができるような働きかけを心がけた	357	4.54	0.63	天井
学級 3	将来学級担任として学級運営をしていくにあたり、自分が努力すべきことについて考えた	357	4.50	0.64	天井
特支 1	発達障害の子どもたちについての理解を深めることができた	357	3.96	0.99	
特支 2	発達障害の子どもたちに対して積極的に関わろうと心がけた	357	4.18	1.02	天井
特支 3	将来教師として発達障害の子どもたちとの関わることについて自信がもてた	357	3.41	1.04	
教科 1	ねらいを明確にし、系統立てた授業計画を立てることを心がけた	357	4.25	0.71	
教科 2	設定したねらいについて、子どもたちがしっかりと理解できているかを確認することを心がけた	357	4.21	0.73	
教科 3	将来教師として、学ぶ意欲を引き出すような授業を行う自信がもてた	357	3.60	0.93	
行事 1	学校行事の意義についての理解を深めることを心がけた	357	4.34	0.73	天井
行事 2	実習校における学校行事の運営や指導の工夫について観察することを心がけた	357	4.47	0.66	天井
行事 3	将来教師として、安全に学校行事を運営することについて自信がもてた	357	3.73	0.86	

2. 講座参加群と不参加群との比較

各講座の参加群と不参加群で、対応する項目について t 検定を行った結果

「生活習慣」講座における t 検定

	生活習慣	度数	平均値	標準偏差	自由度	t 値
習慣 1	参加群	28	4.714	0.535	355	-0.342
	不参加群	329	4.748	0.494		
習慣 2	参加群	28	4.821	0.390	355	0.838
	不参加群	329	4.736	0.530		
習慣 3	参加群	28	3.464	0.962	355	-0.272
	不参加群	329	3.517	0.982		

「学校安全」講座における t 検定

	学校安全	度数	平均値	標準偏差	自由度	t 値
安全 1	参加群	46	4.478	0.623	355	2.056*
	不参加群	311	4.225	0.800		
安全 2	参加群	46	3.544	0.808	355	-0.021
	不参加群	311	3.547	0.976		
安全 3	参加群	46	4.435	0.807	355	-0.375
	不参加群	311	4.476	0.676		

「ICT」講座における t 検定

	ICT	度数	平均値	標準偏差	自由度	t 値
ICT1	参加群	15	3.200	1.146	355	-0.154
	不参加群	342	3.254	1.347		
ICT2	参加群	15	3.267	1.100	355	0.332
	不参加群	342	3.146	1.388		
ICT3	参加群	15	2.933	1.033	355	0.729
	不参加群	342	2.702	1.210		

「マナー」講座における t 検定

	マナー	度数	平均値	標準偏差	自由度	t 値
マナー1	参加群	57	4.702	0.597	355	0.751
	不参加群	300	4.640	0.564		
マナー2	参加群	57	4.719	0.559	355	1.258
	不参加群	300	4.613	0.587		
マナー3	参加群	57	3.860	0.854	355	-0.272
	不参加群	300	3.893	0.859		

「英語教育」講座における t 検定

	英語	度数	平均値	標準偏差	自由度	t 値
英語 1	参加群	18	4.389	0.850	355	3.075**
	不参加群	339	3.525	1.175		
英語 2	参加群	18	4.167	0.924	355	3.02**
	不参加群	339	3.478	1.255		
英語 3	参加群	18	3.722	1.179	355	3.045**
	不参加群	339	2.923	1.080		

「学級経営」講座における t 検定

	学級経営	度数	平均値	標準偏差	自由度	t 値
学級 1	参加群	24	4.750	0.532	355	0.767
	不参加群	333	4.667	0.560		
学級 2	参加群	24	4.625	0.495	355	0.72
	不参加群	333	4.529	0.642		
学級 3	参加群	24	4.667	0.482	355	1.751+
	不参加群	333	4.484	0.652		

「特別支援」講座における t 検定

	特支	度数	平均値	標準偏差	自由度	t 値
特支 1	参加群	32	4.031	1.177	355	0.404
	不参加群	325	3.957	0.974		
特支 2	参加群	32	4.188	1.256	355	0.053
	不参加群	325	4.175	0.995		
特支 3	参加群	32	3.531	1.047	355	0.694
	不参加群	325	3.397	1.045		

「教科教育」講座における t 検定

	算数	度数	平均値	標準偏差	自由度	t 値
教科 1	参加群	11	4.546	0.522	355	1.371
	不参加群	346	4.246	0.719		
教科 2	参加群	11	4.455	0.522	355	1.139
	不参加群	346	4.199	0.737		
教科 3	参加群	11	3.727	0.905	355	0.451
	不参加群	346	3.598	0.934		

「学校行事」講座における t 検定

	学校行事	度数	平均値	標準偏差	自由度	t 値
行事 1	参加群	2	4.500	0.707	355	0.305
	不参加群	355	4.341	0.736		
行事 2	参加群	2	5.000	0.000	355	15.289**
	不参加群	355	4.468	0.656		
行事 3	参加群	2	5.000	0.000	355	2.105*
	不参加群	355	3.718	0.860		

+ p<.1, * p<.05, ** p<.01

第4章（3） インターンシップ講座受講による効果測定

1. 各項目の記述統計

各講座で設定された「獲得させたいコンピテンシー（資質・能力）」に基づいて、各講座につき3項目、計27項目を作成し、平成27年度に教育実習を行った学生に対し、教育実習後の事後指導の授業時に質問紙調査を行った。得られた回答数は357件であった。全調査対象者における各項目の平均値および標準偏差は、表1に示す通りである。

表1 参照

この結果より、27項目中11項目において天井効果が見られた。天井効果が見られた理由として、これらの項目はインターンシップ講座の受講の有無に関わらず教育実習生の心構えとして必要なものであるため、実習特講や通常の講義での学生指導の成果および学生の教育実習へのモチベーションの高さが繁栄されてしまったためと考えられる。この結果より、インターンシップ講座の効果測定を測るためには、より具体的な講座内容を繁栄させた項目策定が必要であろう。

2. インターンシップ講座参加学生と非参加学生との比較

天井効果が見られなかった項目について、各講座の参加群と不参加群で、対応する項目についてt検定を行った結果、「学校安全」の1項目と「外国語活動」の3項目において有意差が見られた（表2）。

表2 参照

今回使用した項目は、多くに天井効果が出るという結果が示すように、一般的に教員になるにあたり心がけなければならない項目が多く存在した。そのため、インターンシップ講座参加の有無にかかわらず、全体的に高い平均を示す結果となってしまった。しかし、有意差が見られた4項目を見てみると、それらの内容は他の項目に比べて実習に臨むにあたり資質・能力の獲得が意識されにくい内容であったと考えられる。それは、「学校安全」については大学の授業であまり扱われない内容であること、また「外国語教育」については英語専修や外国語学部以外の学生にとっては授業時間数に限りがあることが要因であろう。つまり、インターンシップ講座を受けることによって、実習に臨むにあたりこれらの資質・能力の重要性を意識することができ、実習に生かすことができたと考えられる。この結果から、大学でのカリキュラムでは扱いきれない内容をインターンシップ講座が補う役割を果たしていることが示唆される。

3. 学生が希望する講座内容

本調査では、最後に自由記述で実習前に身につけておきたかった内容について聞いている（表3）。

表3 参照

表3に示す通り、指導法に関する講座の要望が多く出された。また、今回インターンシップ講座に出席しなかった学生においても、インターンシップ講座で開講した内容に関する要望が強いことが明らかとなった。このことから、今回の講座は実際に現場で教壇に立つ上で有用なものであることが示唆された。

表1 インターンシップ講座内容に関する項目の記述統計

	項目	度数	平均値	SD	
習慣1	児童の生活習慣や学習習慣を把握するように心がけた	357	4.75	0.50	天井
習慣2	児童のやる気を促すような働きかけを心がけた	356	4.73	0.47	天井
習慣3	児童の生活習慣や学習習慣について、将来学級担任として指導していく自信がもてた	356	3.50	0.94	
安全1	実習校での安全に対する取り組みについて理解を深めることを心がけた	356	4.24	0.74	
安全2	児童が学校で安全に生活するために、将来学級担任として指導していく自信がもてた	356	3.53	0.91	
安全3	児童が学校で安全に生活するために学級担任がどのような工夫をしているのかを観察することを心がけた	356	4.46	0.65	天井
ICT1	実習校での ICT 機器の活用状況について観察することを心がけた	357	3.25	1.34	
ICT2	ICT 機器の効果について理解を深めることを心がけた	356	3.13	1.34	
ICT3	将来教師として ICT 機器を活用していく自信がもてた	357	2.71	1.20	
マナー1	社会人としてのマナーを心がけた	357	4.65	0.57	天井
マナー2	学校教育において、マナーの重要性を理解を深めることを心がけた	357	4.63	0.58	天井
マナー3	将来社会人としてのマナーを身につけた教師になる自信がもてた	357	3.89	0.86	
英語1	外国語活動による児童への効果について理解を深めることを心がけた	357	3.57	1.18	
英語2	英語でコミュニケーションを図ることができるように学級担任がどのような工夫をしているのかを観察することを心がけた	357	3.51	1.25	
英語3	児童に英語のコミュニケーション能力を養うために、将来学級担任として指導していく自信がもてた	357	2.96	1.10	
学級1	担任と子どもたちとの信頼関係を築くために学級担任がどのような工夫をしているのかを観察することを心がけた	357	4.67	0.56	天井
学級2	子どもたち同志の信頼関係を築くことができるような働きかけを心がけた	357	4.54	0.63	天井
学級3	将来学級担任として学級運営をしていくにあたり、自分が努力すべきことについて考えた	357	4.50	0.64	天井
特支1	発達障害の子どもたちについての理解を深めることができた	357	3.96	0.99	
特支2	発達障害の子どもたちに対して積極的に関わろうと心がけた	357	4.18	1.02	天井
特支3	将来教師として発達障害の子どもたちとの関わることについて自信がもてた	357	3.41	1.04	
教科1	ねらいを明確にし、系統立てた授業計画を立てることを心がけた	357	4.25	0.71	
教科2	設定したねらいについて、子どもたちがしっかりと理解できているかを確認することを心がけた	357	4.21	0.73	
教科3	将来教師として、学ぶ意欲を引き出すような授業を行う自信がもてた	357	3.60	0.93	
行事1	学校行事の意義についての理解を深めることを心がけた	357	4.34	0.73	天井
行事2	実習校における学校行事の運営や指導の工夫について観察することを心がけた	357	4.47	0.66	天井
行事3	将来教師として、安全に学校行事を運営することについて自信がもてた	357	3.73	0.86	

表2 講座参加群と非参加群との比較

		度数	平均値	標準偏差	自由度	t 値
安全 1	参加群	46	4.478	0.623	355	2.056*
	非参加群	311	4.225	0.800		
英語 1	参加群	18	4.389	0.850	355	3.075**
	非参加群	339	3.525	1.175		
英語 2	参加群	18	4.167	0.924	355	3.02**
	非参加群	339	3.478	1.255		
英語 3	参加群	18	3.722	1.179	355	3.045**
	非参加群	339	2.923	1.080		

+ p<.1, * p<.05, ** p<.01

表3 実習前に身につけておきたかった内容

カテゴリー		回答例	反応数
指導法	板書	・綺麗な字の書き方 ・書き順 ・板書計画	14
	指導案	・複数の教科の指導案の書き方 ・PCでの指導案の作りかた	12
	教科教育	・専門教科意外の指導法 ・道徳教育 ・音楽 ・図工	9
	模擬授業	・机間巡視 ・発問の方法	11
マナー		・敬語・丁寧語 ・気の使い方 ・お礼状の書き方	10
外国語教育		・教室英語の表現 ・英語のアクティビティ	4
ICT		・引きつける ICT の活用 ・ICT 教材の知識, 理解	4
安全		・教室内の環境整備	1
子ども理解		・児童との関わり方 ・子どもの発達の理解	4
特支		・障がい児への対応方法 ・発達障害の理解	4

第5章 学校インターンシップ体験校（小中学校）訪問レポート

・訪問した体験校毎に、（1）学生の活動の様子、（2）体験校の担当の先生へのインタビュー（「平常の学生の活動内容・様子」「どんな能力がついたと思われるか」）、（3）体験学生へのインタビュー（「活動内容」「どんな能力がついたと思われるか」）を記す。

① 羽島市立堀津小学校 （担当 吉田俊和）

② 安八町立結小学校 （担当 佐藤）

学校インターンシップ体験校視察報告

羽島市立堀津小学校（報告者：吉田俊和）

（学生 学校心理課程 4年 某）

訪問日 11月20日 教務主任および校長先生とのインタビュー11:00～、授業 11:40～

(1) 学生の活動の様子

訪問日は、小学5年生の理科に補助として入っていた。理科室で行われるため、事前準備のため、担当教師の指示で使用器具の準備を始めていた。教師の説明の後、6グループに分かれて実験を始めた子どもたちを見回る。内容は、水の中に物質が溶けた場合、重さはどうなるのか？指定された分量の水の重さの測定と、溶かす物質の重さを事前に想定し、物質を水の中で攪拌させて重さを量るという実験である。水の重さや物質の重さを変えて、計測した結果をグループごとに報告する授業であった。学生は、あちこちのグループを補助しながら、課題に取り組みせていた。教師の補助教員としては十分な働きをしていた。

(2) 体験校担当教員へのインタビュー

通常は、4人の学生が学期ごとに、曜日を決めて登録する。午前中が原則であり、1年間継続する。勤務状態は、大変良好であるとのことである。教務主任が、週ごとに、補助に入ってもらいたい授業を先生たちから募り、4時間の時間割を組んでいる。1学年1学級なので、学生は、全ての学年のクラスに入っているとのこと。教務主任から学生を観ていると、4月当初より、明らかに自信を持って児童に接している。現場の教師は、補助に入ってもらえると、個別指導の大きな戦力になる。逆に言えば、学生にとっては、子どもの躰き方を学ぶことができる。学校行事等でも、学校は安全面を確保するための戦力になるし、学生は学校行事のあり方を学ぶことができる。また、現場教師のスキルを学び、学級経営のノウハウを学んで欲しいとの期待。これらは、毎回の記録として、学生から提出してもらい、コメントを付けている。1年間分は、最後に、学生に還元される。

校長からは、進路設計の見直しにして欲しいとの要望。最近では、教職に就いてから「自分は向いていない」と言って早期離職も目立つので、インターンシップで自分の適正を見極めて欲しいとのこと。現場へ着任したときに、即戦力になれるよう、1年間の学校生活を学んで欲しいとのこと。

(3) 体験学生へのインタビュー

一番大きな収穫は、教育実習では担当学年しか経験できないが、全ての学年の授業に入るので、小学生全体と接することができるし、全ての教科や学級経営の仕方、学校行事の体験ができることである。さらに、4週間だけの児童ではなく、1年間の児童の成長を観ることができる。教師によって、いろいろな取り組み方があり、それらを比較すると、担当学年や教師のキャリアによって異なり、現役の教師以上に、多くのノウハウを経験できる。この学校の独自性かもしれないが、こういうインターンシップ経験は貴重である。何かの能力が直接付いたかどうかはわからないが、いろいろな経験が将来役立つような気持ちにさせてくれる。

学校インターンシップ体験校視察報告 安八町立結小学校 「遊び塾」 (報告者：佐藤)

◆活動目的(学校の願い)

体力・運動能力低下への問題意識から、子どもの外遊びを活性化するために実施

◆活動内容

1月から3月に実施。

水曜日昼休み(45分間)に運動遊びを紹介して実施する。

遊びの内容:体じゃんけん、大根抜き、鬼遊び、王様ドッジボール、等

◆学生の様子

学生2,3名に対して、児童は30名程度である。学生が対象児童の実態に合わせて準備した遊びを紹介する。児童は楽しそうに遊んでいた。学生はルールが伝わらないときにはくり返し説明したり、ふざけている児童がいるときには注意したりと意欲的に取り組んでいた。よい動きをしている児童や一生懸命プレイしている児童には積極的に賞賛の声をかけていた。担任教師もサポートしていただき、児童への指導を随時行っていた。

◆学校側へのインタビュー(獲得されるコンピテンシー)

インタビュー対象者は学校長である。学生は大変よくやっている。表情は明るく、ハツラツと取り組んでおり、児童に対してよい影響を与えている。運動遊びを実施するときに、児童が怪我をしないように配慮し、用具や場に危ないところはないかを確認する。そのため「学校安全」に関する資質・能力を獲得することができる。また、子どもへルールを説明したり、楽しく集団を遊ばせるためのコツをつかんだりすることは「学級経営」の力のベースを育んでいると思われる。ときどき、実態に合わない遊びを紹介することで慌てることもあるようだが、それも学びの一つである。

遊び塾の後、5時間目に学習指導補助に残ってもらうことがある。そこでは算数のT2、体育の実技補助などとして活動してもらっている。担任教師の指導の様子、その補助を実際に行うことから「教科指導」に関する資質・能力も獲得していると考えられる。



第6章 学校インターンシップを行う他大学訪問レポート および 他大学からの来訪者レポート

・訪問した大学：

- ① 12月10日 静岡大学
- ② 1月10日 関西大学

・御来訪いただいた他大学の教員：

- ③ 2月15日 愛知東邦大学教育学部長 今津孝次郎 氏

「教員養成における大学中心と学校現場中心—「学校インターンシップ」(中教審答申)をどう受け止めるか—

2016年2月15日(木曜日) 今津孝次郎氏(愛知東邦大学教育学部長)の本学訪問を受け講演

「教員養成における「大学中心」と「学校現場中心」
—「学校インターンシップ」(中教審答申)をどう受け止めるか—

を頂き、その後両大学の実践的教員養成について情報交換・意見交換を行った。

[講演の要約]

2015年12月の中教審答申後、教員免許法改正・省令改正に向け、高速で進んでいる状況である。これは、教員免許の戦後最大規模の改変になると思われる。

大学側としては、「カリキュラム見直し：教科科目と教職科目の一体化」、「学校インターンシップを科目として立てるか」、「教育委員会との連携」が焦点になる。

学校インターンシップを軸として、教員養成が「大学中心」から「学校現場中心」へ傾斜するのだろうか？

「学校現場中心」が、現場への丸投げ、大学教育の専門学校化を招きかねない。

「学校ボランティア」(「自発的」活動で「学習」の意味合いが薄い)と「学校インターンシップ」(下手をすると徒弟奉公か教員採用試験合格目的化しかねない)の2項対立でなく、中間に「サービス・ラーニング」(Jacoby)がありうる。

「サービス・ラーニング」はボランティアでもインターンシップでもなく、サービスの「受け手」と「送り手」の双方にとって利益を生み出す。

「サービス・ラーニング」は、「プレ教育実習」や「スクリーニング」(適性の有無の確認)「ライフデザイン」(進路展望)の機能を持つ。

「サービス・ラーニング」は、省察(リフレクション)(ドナルド・ショーンの reflection in action)によって、「(学校現場での)具体・個別」から「抽象・一般」へ深化しうる(Kolbの経験学習サイクルモデル)。この省察の促進において大学が役割を果たしうる。

愛知東邦大学では、この「サービス・ラーニング」の運営的裏づけとして、「学生の時間割と小中学校の時間割のすり合わせ」「現場と大学のニーズのすり合わせ」「法人本部とのすり合わせ」を考慮した。

[質疑応答から]

Q. 大学と現場の2者関係において、研究する教師をどう育てるか？

自信をなくして辞める新任教師がいる中で、教員志望学生に自信を与えることも大学の役割でないか？

A. 文部科学省のいう「学び続ける教師像」はまさしく teacher as researcher である。Kolb の言う個別・具体の抽象化を教えたらよい。

Q. 官の側から大学への要求が厳しくなっているが。

A. 大学人としてのメッセージを、もっと大学から官へ発信すべきである。

④本学教育学部 GP 委員ではないが本学教育学部所属の学校教育学者である三山緑氏との懇談を経て、有益な知見を得た：

・教員養成学部には、教職実践演習がある。教職実践演習は大学4年間の教職科目を統合し、教師を目指す上で求められる力の総まとめである。学校インターンシップと教職実践演習の関連を明確化すべきである。

・教師教育は、養成・採用・形成の3段階で出来ている。資質能力の獲得は、卒後も「学び続ける教師像」ということで、培われていく。大学4年間での資質能力の向上だが、項目作定をやりすぎると無用の長物になりかねない。大学4年間でどれだけできるかという限界を考慮してカリキュラム開発をすべきである。

・先行研究をよく読む事と問題点も正直に報告書に書くことの重要性が強調された。佛教大学の原清治氏の研究に触れ、学校インターンシップは、直接的には教員採用対策にならないが、現場で尊敬され教材研究に熱心な教師の姿に触れることで間接的に教員就職意欲を上げている事、学校インターンシップでは省察が重要であるが、これは学生同士よりもファシリテーター（現場および大学教員）も介在してより良く促進される事、が教示された。

GP 委員会 静岡大学 出張報告書

以下のとおり出張の報告を致します。

1. 出張者

教育学部専任講師 中島葉子（GP 委員）、教育学部教授 福田茂隆（GP 委員会委員長）

2. 出張期間

平成 27 年 12 月 9 日（水）18 時 00 分から平成 27 年 12 月 10 日（木）16 時 00 分

3. 出張先

静岡大学教育学部附属教育実践総合センター
静岡市駿河区大谷 8 3 6 教育学部 L 棟

4. 面談者

教育学部長 菅野文彦教授
教育学部附属教育実践総合センター 長谷川哲也専任講師

5. 出張目的

学校インターンシップに類する事業の視察および今後の展望等についての意見交流

※事前に 5 項目の質問事項を伝えた

6. 出張結果

事前に伝えた 5 項目の質問事項について、資料や補足説明を加えながら回答いただいた。

質問 1：学校インターンシップを実施するにあたり、都道府県教育委員会・市町村教育委員会・市町村立小中学校との連携について。

質問 2：学校インターンシップの活動内容が、どの程度受け入れ先の小中学校により決まり、どの程度貴学により決まるか。

回答：

静岡大学教育学部では附属教育実践総合センターを窓口として「学校支援ボランティア」事業（教科又は教職に関する科目として単位化、3, 4 年生対象）を展開しており、2006 年度より静岡市と連携協定を結び、静岡市内の小中学校を中心に学生を派遣している。静岡市は静大だけでなく静岡市内にあるすべての大学と連携協定を結んでいる。静岡市の場合、市教委から学校単位でまとめられた募集一覧（「静岡市学生スクールボランティア募集一覧表①」）を学生が見て行きたい学校を選択し、事前指導を受け、活動校での面接を経て採用となる。その他にも、焼津市、藤枝市、島田市、富士市などからボランティア派遣の要請を毎年受けている。静岡市内の学校から継続的なボランティア派遣要請がある場合は市教委を通して依頼があり、単発的な依頼や静岡市以外の市からの依頼は学校から大学へ依頼がある場合が多い。「学校支援ボランティア」活動は基本的に「ボランティア」であることから、活動内容や活動時期等は派遣依頼のあった学校によって決められる。

事前指導および登録は、4 月の第 3 週に事前指導 week を設けるほか、その後はセンター専任の担当者が随時受け付けている。教育実習後に実習校から学生に直接依頼があった場合も、センターを通し事前指導と登録を行うことが学生に周知されている。

質問 3：多種多様のインターンシップの内容で、如何に教師として求められる資質・能力を向上させていくか。

回答：

活動内容が活動校によって決められる「ボランティア」という形態は、学校現場のニーズにマッチする一方、活動で学生がどのようなことを学び、どのような資質能力を身に付けるのかをコントロールすることは難しい。学校現場の教員が期待する成果は『平成 25 年度文部科学省委託 教育委員会・大学の連携による「学校支援ボランティア」の指導・評価システムの構築—「教員初期スタンダード」をもとにした資質能力向上を目指して—』のとおりである。

ただし、静大教育学部では、ボランティアに参加した学生に対して振り返り会の参加を呼び掛けており、大学教育の責任としては、振り返りによって資質能力を向上させることを目指している。

質問 4：学校インターンシップで資質・能力の向上を測定するシステムについて。

質問 5：学校インターンシップを単位化する予定があるか。単位化することしないことのメリットデメリットについて、また単位化するとすればそれに伴う成績の付け方、事前事後の座学の位置づけについて。

回答：

静大教育学部では、教科又は教職に関する科目として「学校支援ボランティア体験Ⅰ／Ⅱ」を単位化している。単位取得の手順は、『学校支援ボランティアの手引き 2015』のとおり。なお、単位取得の有無にかかわらず、附属教育実践総合センターを窓口としたボランティアに参加する学生は、センター専任教員の事前指導を受けることとなっている。事後指導としては、教職支援室で年 3 回の振り返り会を開催しており、単位取得希望者に対して 2 回以上の出席を求めている。振り返り会は、7 月、10 月、12 月の 3 期に分けて開催される。振り返り会への参加は推奨されるが必須ではなく、単位取得を望む学生が 1~2 回参加する（1 回の参加で、教職実践演習の一部を代替できる）。

客観的な測定システムは構築していないが、平成 25 年度の文科省事業で活動の「評価シート」を作成し、振り返り会で利用している。成績評価は、この「評価シート」の記述および活動状況の記録をもとに行っている。

振り返り会に参加する学生は、事前に「評価シート」に記入の上で振り返り会に参加し、4 人程度のグループに分かれシートをもとにディスカッションを行う。ディスカッションの内容を全体でシェアし、専任教員の指導助言、まとめの記入という流れである。静大教育学部では、学生が自身の行為を相対化し、主体的に課題を発見し、課題解決に向けて行動する力を獲得させることを目的とし、事前指導よりも事後指導に力を入れている。ただし、振り返りシートのあり方も含めて、振り返りで何を学ばせ、そのためにどのような方法をとるのかについては課題として残されている。

「学校支援ボランティア」はあくまでボランティアのため、単位取得を必修化しているわけではない。ただし、活動による学びを豊かにし、資質能力を育成するという観点から、出来る限り振り返り会に参加し、単位を取得するよう呼びかけている。とはいうものの、学生にとって「学校支援ボランティア」の単位取得に対するニーズはそれほど高くなく、多くの学生にとってはボランティアを行うこと、学校現場での経験を増やすことに重点がある。そのため、振り返り会への参加率はさほど高くない。

現在のところは自主的・主体的な活動のため、大きなデメリットは感じていないが、必修とした場合は学生の自主性・主体性が確保されるのか、意欲の低い学生を学校現場に送り出すことにならないか、危惧される。また、振り返り会のような大学での学びの機会をどのように確保するのも課題となるだろう。

7. いただいた資料

- ・「静岡市学生スクールボランティア募集一覧表①」
- ・『平成 25 年度文部科学省委託 教育委員会・大学の連携による「学校支援ボランティア」の指導・評価システムの構築―「教員初期スタンダード」をもとにした資質能力向上を目指して―』
- ・『学校支援ボランティアの手引き 2015』
- ・「『学校支援ボランティア』振り返り会について
- ・「平成 27 年度 10 月期『学校支援ボランティア』振り返り会」
- ・「平成 27 年度 10 月期『学校支援ボランティア』振り返り会次第」
- ・長谷川哲也・菅野文彦・今津幸次郎, 2015, 「教員を目指す学生による『学校現場体験』の再検討―静岡大学と愛知東邦大学の実践を事例として―」（日本教師教育学会第 25 回大会）配布資料
- ・『平成 22 年度教育実践総合センタープロジェクト成果報告書 静岡大学教育学部における学生ボランティアの実態調査報告書』

GP 委員会 関西大学 出張報告書

以下のとおり出張の報告を致します。

1. 出張者

教育学部准教授 佐藤善人(GP 委員会副委員長)、教育学部教授 福田茂樹(GP 委員会委員長)

2. 出張期間

平成 27 年 1 月 15 日(金) 8 時 50 分から 17 時 35 分

3. 出張先

関西大学 高大連携センター
大阪府吹田市山手町 3-3-35

4. 面談者

高大連携センター長 山本冬彦教授
高大連携センター 富山浩嗣課長
高大連携センター 木下賢治センター員

5. 出張目的

学校インターンシップに類する事業の視察及び今後の展望についての意見交流
※事前に 5 項目の質問事項を伝えた

6. 出張結果

事前に伝えた 5 項目の質問事項について、資料や補足説明を加えながら回答いただいた。

質問 1：学校インターンシップを実施するにあたり、都道府県教育委員会・市町村教育委員会・市町村立小中学校との連携について

回答：

関西大学は大阪府吹田市に位置していながら、大阪府教育委員会、京都府教育委員会、並びに両府と兵庫県の 21 市の教育委員会と連携協定を結んでいる。近畿圏は府県の垣根が低い。週 5 日制への対応から、大阪府教育委員会の依頼で教職員対象の研修会開催が求められ、それに応じることで教育委員会との連携が密となった。2003 年度から文学部(学生数 700~800)で学校インターンシップが始まった。大学だけではなく、社会(学校)で学生を育てようというねらいであった。当初は文学部のみで実施していたが、他学部(13 学部)にも広げ、幼稚園から高校までを対象に実施している。その過程で連携協定を結ぶ教育委員会が増加し、現在に至っている。なお連携協定を結ぶ教育委員会は、学生が参加可能な地域に限定しており、遠方は依頼があっても断っている。

小中学校は教育委員会を通じて大学へ申請する。園・高校は直接大学へ申請する。

質問 2：学校インターンシップの活動内容が、どの程度受け入れ先の小中学校により決まり、どの程度貴学により決まるか

回答：

基本的には学生の受入を希望する学校・園に任せている。年度初めにエントリーしてもらい、学校インターンシップの内容を大学側へ申請する。その際、短期連続型(2 週間程度など)と長期型(毎週 1 回など)

に分けて申請する。その内容を学生が確認して申し込む。そのため、魅力的な内容でないと学生は申し込まない。2014年度は延べ900名近い申請に対して、177名のみの参加となっている。つまり魅力がない内容には学生は集まらない。大学としては魅力ある内容で申請してほしいことを学校・園に伝えている。

質問3：多種多様のインターンシップの内容で、如何に、教師として求められる資質・能力を向上させていくか

回答：

関西大学では大きく2つの能力が養われると考えている。1つは「教員の仕事は子どもと関わることだけでなく、実に多様なことを知る」ことである。もう1つは「コミュニケーション能力の育成」である。学校インターンシップは1年生から実施しており、必ず大学教員が面接を実施してから送り出している。しかし教員志望の学生であっても、学校現場の実態を知ることによって進路変更をする者もいる。そのためできるだけ早いうちに教員の仕事に触れることが必要だと考えている。もちろん益々意欲的に教員を志す学生も出てくる。

子どもとの距離感、叱り方やほめ方といったコミュニケーション能力は大学では身につくものではない。もちろんこの能力は学校・園だけで求められることではなく、企業に勤めても必要である。1,2年生のうちに学校インターンシップでこれらについて学び、教科指導や生徒指導などの具体的な内容は、教育実習や各教育委員会が実施している「教師塾」のようなところに負ってもらおうと考えている。

質問4：インターンシップを通して資質・能力の向上を測定するシステムについて

質問5：学校インターンシップの単位化に伴う成績の付け方、事前事後の座学の位置づけについて

回答：

参加した日数分の日報の提出を義務づけている(A4一枚)。また学校インターンシップが終了した時点で研修報告書の提出も義務づけている(A4一枚程度)。学生には学校に出向く前に課題設定を明確に行うよう指導している。そして実際にあったエピソードを具体的に書くように指示している。それらを用いて、事後報告会を年2回実施している。そこでは少人数グループでのグループワークが実施される。そこには受入側の教員や教育委員会の指導主事が入り、指導を行う。事後指導は是非行うべきである。

関西大学ではインターンシップは単位化されている。3コマ×2単位の取得が可能である。2単位のためには、ガイダンスやマナー指導、事後報告会など9時間の事前事後指導への参加が義務づけられ、36時間以上の学校インターンシップでの研修が必要となる。単位はいらないが学校へは行きたいという学生は受け入れない。

その他

- ・ 上限(12500円)を設けて、交通費を補助している。
- ・ 大学院生も参加している。
- ・ 文学部初等教育課程では、学校インターンシップを1年次に必修化しており、吹田市に受け入れてもらっている。
- ・ ウェブで申請を管理するシステムが昨年度から構築されており、事務作業が軽減された。
- ・ 毎年、大学が学校インターンシップの報告書を作成して成果を積み上げている。

第7章 ポートフォリオシステム作成

(A) 本学の実践的教員養成プログラムであるクリスタルプラン（平成 17 年度教員養成 GP 採択）のコア科目は、「1 年次学校触れ合い体験」「2 年次教育実践観察」「3 年次小学校・中学校教育実習」である。これらを通したコンピテンシー（資質・能力）の向上を図るため、評価項目「クリスタルプラン 13 の視座」を確定させ、「1 年次学校触れ合い体験事後指導」「2 年次教育実践観察事後指導」「3 年次教育実習後 12 月中旬以降」の時点で学生が自己評価し、時系列の向上を視る電子ポートフォリオシステムを作成した。

(B) 2015 年 10 月のアンケート（第 4 章 小学校教育実習直後アンケート）を（結果の分析に基づき項目を）改訂して、今後は、学校インターンシップ事前指導および事後指導の計 2 回、効果測定の為にアンケートを採る電子ポートフォリオシステムを作成した。改訂にあたり、文言を事前事後両方で通用するものに改めた。

(C) 本学教育学部の従来の電子ポートフォリオシステム（：組織への帰属感、自己肯定感、教員就職意欲などを年 2 回ほど観測する）である「教育学部一斉アンケート」の分析に基づくレーダーチャートを学生がそれ程見えていない状況を改善すべく、学生が教育学部一斉アンケートシステムに入力する前に、自動的にレーダーチャートを視るようなシステムに改変した。

第7章 (A) 現代GP クリスタルプラン評価観点について

CP 2 1世紀の教師像「求められる教師像・評価体系」のスリム化

- (2013年度拡大GP委員会答申を2014年度CP委員会で修正したもの(20150401教授会報告)を、「ふれあい」・「実践観察」科目代表を交えた20151208拡大CP委員会で修正) (2014年度は「実習との対応」を修正したが、2015年度は[評価項目]を学生の[自己評価項目]とすべく、体験(実習)する学生にとって[評価項目]を分かり易く適切なものに修正することを主眼とした。)
- 教員としてのスキルに関する側面は21世紀の教師像「求められる教師像・評価体系」の評価観点を導入した。
 - すでに実施中の大学適応感・教員就職意欲等、他の評価項目間で内容に重複があると思しき項目を除いて簡略化した。
 - 自己評価、あるいは第三者からの客観的評価が難しい項目は省略した。
(実習中の行動や、ノート・レポート上の記述などで明確に振り返りやすい項目を優先的に残す。)
 - 難易度の低すぎる(できて当たり前な)項目は除いた(ただし、これは項目反応理論等の統計的な基準で今後も厳選を続けていきたい)
 - 各実習ですべての評価観点を満たすことは現実的に難しいため、それぞれの実習で関連付けられそうな観点を付表に示した。ただし、各CP科目の初回および最終回の全体指導の時間を利用して測定ではすべての観点について測定を行いたい。

基本的視座	求められる教師像 要素的能力	下位の構成概念	自己評価項目	実習との対応
①高い倫理観と 教職への情熱	「人間のモデル」としての自覚性と誠実性・ 教育への情熱	①毎日の自分の生活行動や言動、 姿勢等に関する自律性と自負 ②教職に対する意欲、情熱、誠意 ③向上への強い意思と志向	自分の姿やあり方が、子どもにとって 「人間のモデル」になるのだからというこ とを、実感として受け止めることがで きたか。 毎日の自分の生活行動や言動、姿勢に 関する自律性と自負への意識をもつ て、自分自身の日常的な生活行動のあ り方を、良い方向へと向けることがで きたか。	学校ふれあい体験 教育実践観察 教育実習

②教育者としての使命感、責任感	「人間を育成する」教育活動の厳粛な使命についての認識	①教育時間中における生命の安全についての配慮 ②学習の成果について「学ぶ側」にたつての考察と確認 ③教育関係における感情のコントロール ④教育活動に関わる職務遂行のための自己欲求のコントロール	教職体験を通して、人間としてのあり方について、絶えず自分を啓発する必要性を理解することができたか。	
③広く豊かな教養と人間性	広い視野と円満な人格性、豊かな知識	①教師は教科と教職に関する知見だけでなく幅広い教養が求められることの理解とそのため自己研鑽への意欲 ②上記のために、社会の動きに絶えず関心をもち、積極的に情報収集する必要性の理解	子どもとふれあって、その生命を守り、安全を確保する責任の重さを自覚できたか。 すべての子どもが向上しようとしていれることを実感できたか。 子どもが本当に学ぶことができたかという視点で、自分の指導を省察することができたか。	学校ふれあい体験 教育実践観察 教育実習
④開かれた社会性	教育現場での人間関係を円満にし、安定した心理状態で前向きな教育活動に専念するために、社会的な関係を調整する能力	①学校教職員に対して ②PTA・保護者に対して ③地域の人々に対して	誰に対しても、明るい態度であいさつや日常会話をきちんとすることができたか。 チーム学校の一員として、困ったことを相談したり、率直に教えを請うたりすることができたか。	教育実践観察 教育実習

<p>⑤人間の成長・発達についての基本的な理解・認識と子どもの個性の把握</p>	<p>人間の成長、発達についての基本的な理解・認識に関わる能力が、教育実践において、有効に機能できたかの実践的検討</p>	<p>① 子ども理解 ② 能力・適性に応じた指導</p>	<p>子どもをとらえ、理解する場面や方法を見出すことができたか。 一人一人の持ち味を認めたりうえで、ほめたり励ましたりできたか。 子どもの発育・発達には、違いがあることを理解することができたか。</p>	<p>学校ふれあい体験 教育実践観察 教育実習</p>
<p>⑥子どもに対する深い愛情</p>	<p>子どもに対する深い慈愛と教育的愛情</p>	<p>①子どもが大好きという感情 ②必要に応じて、きちんと叱責できる節度性 ③子どもに対して、自分の感情をコントロールできる寛容性</p>	<p>「自分は教育者である」との自覚をもち、「良いことと悪いこと」の区別をし、愛情をもって指導することができたか。</p>	<p>学校ふれあい体験 教育実習</p>
<p>⑦健やかな心身と積極的な行動力</p>	<p>日常的な子どもとの関わりにおいて、明るく元気に前向きに対応するのは、健康な心身が大切であることの理解</p>	<p>①自分の健康管理に対する日常的な配慮の必要性の認識 ②「まず、行動する」ことができる積極性 ③身体の不調を早く回復し、明日に備えようとする建設的な生活性</p>	<p>信頼される教師にとって、自分の心身の健康管理が大切であることが理解できたか。</p>	<p>学校ふれあい体験 教育実習</p>
<p>⑧教科に関する専門的な知識・技能</p>	<p>子どもの側に立った、教材に対する知識と教材への広く深い理解と把握</p>	<p>①教材に対する知識と理解、把握のための基礎・基本的な学力についての自信と自負 ②上記のための専門的な識見についての自信と自負</p>	<p>授業実践において、大学で学んだことを基礎学力として活かすことが（実感として理解）できたか。 授業の計画、実施、評価のプロセスにおいて、自身が身につけた知識や技能が十分であると自信をもつことができたか。</p>	<p>教育実践観察 教育実習</p>

<p>⑨授業の遂行に必要な資質や能力</p>	<p>授業の計画、立案、展開、評価等の実際的な学習指導力</p>	<p>①学習指導に必要な教材を準備し、活用する能力 ②授業内容を組み立てる能力 ③授業展開に必要な教育環境を整備する能力 ④単元指導計画を含む指導案の立案能力 ⑤板書、発問、補充教材の活用等の技能</p>	<p>授業内容を組み立てるには、教材解釈、子どもの実態把握など、深く広いさまざまな知識や技術が必要であることを実感できたか。 指導案の立案から成案の完成まで大変な時間と努力が必要であることを実感として理解できたか。 指導案に基づいて指導を行いつつ、子どもの実態に応じて臨機応変に対応して授業を展開することが（実感として理解）できたか。</p>	<p>教育実践観察 教育実習</p>
<p>⑩学級経営力</p>	<p>確かな学級経営には、教師と子どもとの信頼関係が必要であり、それが確かな学習が成立する前提であることの理解</p>	<p>①教師の子どもに対する日常的な人格のふれあいから深い教育関係が培われることの理解 ②学級の中のいじめ、不登校傾向、存在感を示せない子どもなども、多様な子どもがいることの理解 ③学級の生活環境を整理する能力 ④日常の記録や事務を確実に処理する能力</p>	<p>子どもに愛情を注ぎながら、然るべき時には厳しく指導することができたか。 一人一人の存在感を高めるために学級経営には細かい配慮や創意工夫が必要であることを理解できたか。 学習環境の整備を工夫するとともに、居心地の良さを重視し、生活環境にも配慮することができたか。</p>	<p>教育実習</p>
<p>⑪コミュニケーション能力</p>	<p>相手に応じて適切に対応できる能力</p>	<p>自分の考えを相手にわかりやすく、率直に伝える能力</p>	<p>相手の立場に立ってその言動を受容し、適切に対応できたか。</p>	<p>学校ふれあい体験 教育実習</p>

<p>⑫カウセンセリンドに グ・マイセンンドに 立つ人間の理解 力</p>	<p>多様な生活背景を抱 えた個々の子どもを、 まるとして理解し、受容 し、援助していく能力 や態度</p>	<p>①子どもは家庭や学校において、 さまざまな生活背景や人間関係の 中で生きていることへの理解 ②子どもがおかれた家庭的・社会 的な状況をふまえて、子どもの側 に立った共感的理解</p>	<p>課題の解決を急がずに、個の状況に応 じて、まず共感者として関わっていく ことの大切さが理解できたか。</p>	<p>教育実習</p>
<p>⑬教育機器活用 能力</p>	<p>的確な情報処理技術 を含む情報管理・情報 倫理に関する能力・態 度</p>	<p>①教育的視点をもったICT活用能 力 ②情報管理・情報倫理に関する態 度・能力</p>	<p>学習指導や子どもも理解・評価・事務処 理等の資料作成にあたって、教育機器 を効果的に活用することができたか。 個人情報や著作権の保護に関わる情報 管理の問題について、厳正に対応でき たか。</p>	<p>教育実習</p>

表. 「目指すべき教師像」各視座と各実習との対応関係													
	視座1	視座2	視座3	視座4	視座5	視座6	視座7	視座8	視座9	視座10	視座11	視座12	視座13
	倫理観と 情熱	使命感・ 責任感	教養と人 間性	社会性	成長・発 達の理解	子どもへ の愛情	健やか な心身・ 行動力	教科の専 門知識	授業遂行 能力	学級経営 力	コミュニ ケーション 能力	カウンセリ ングマイン ド	教育機器 活用能力
教育実習	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
教育実践観察	○	○	○		○			○	○				
学校ふれあい体験	○	○			○	○	○				○		

第7章 (B)

学校インターンシップアンケート項目を右データに従い改訂		度数	平均値	SD	
習慣 1	児童の一人一人の実態の把握を心がけた	357	4.75	0.50	天井
習慣 2	決まりを守ることの大切さの指導の仕方を観察することを心がけた	356	4.73	0.47	天井
習慣 3	児童の生活習慣や学習習慣について、将来学級担任として指導していく自信がもてた	356	3.50	0.94	
安全 1	実習校での安全に対する取り組みについて理解を深めることを心がけた	356	4.24	0.74	
安全 2	児童が学校で安全に生活するために、将来学級担任として指導していく自信がもてた	356	3.53	0.91	
安全 3	学校での安全を守るため、児童にとって危険がないか常に気を使っていた	356	4.46	0.65	天井
ICT1	実習校での ICT 機器の活用状況について観察することを心がけた	357	3.25	1.34	
ICT2	ICT 機器の効果について理解を深めることを心がけた	356	3.13	1.34	
ICT3	将来教師として ICT 機器を活用していく自信がもてた	357	2.71	1.20	
マナー 1	教師としてふさわしい言葉づかいや身だしなみを心がけた	357	4.65	0.57	天井
マナー 2	教員としての身だしなみの大切さを理解することができた	357	4.63	0.58	天井
マナー 3	将来社会人としてのマナーを身につけた教師になる自信がもてた	357	3.89	0.86	
英語 1	外国語活動による児童への効果について理解を深めることを心がけた	357	3.57	1.18	
英語 2	英語でコミュニケーションを図ることができるように学級担任がどのような工夫をしているのかを観察することを心がけた	357	3.51	1.25	
英語 3	児童に英語のコミュニケーション能力を養うために、将来学級担任として指導していく自信がもてた	357	2.96	1.10	
学級 1	子どもたちとの信頼関係を築くために、子どもたちとの関わり方を工夫する努力をした	357	4.67	0.56	天井
学級 2	クラスでの集団活動の大切さを伝えるような働きかけを心がけた	357	4.54	0.63	天井
学級 3	学級での規律づくりの仕方を観察することを心がけた	357	4.50	0.64	天井
特支 1	発達障害の子どもたちについての理解を深めることができた	357	3.96	0.99	
特支 2	発達障害の子どもへの個性に即した対応ができるように心がけた	357	4.18	1.02	天井
特支 3	将来教師として発達障害の子どもたちとの関わることについて自信がもてた	357	3.41	1.04	
教科 1	ねらいを明確にし、系統立てた授業計画を立てることを心がけた	357	4.25	0.71	
教科 2	設定したねらいについて、子どもたちがしっかりと理解できているかを確認することを心がけた	357	4.21	0.73	
教科 3	将来教師として、学ぶ意欲を引き出すような授業を行う自信がもてた	357	3.60	0.93	
行事 1	学校行事を通して育まれる力がどのようなものかを理解することができた	357	4.34	0.73	天井
行事 2	学校行事の体験を日常の学級生活に生かすためにどのような工夫をしているのかを観察することを心がけた	357	4.47	0.66	天井
行事 3	将来教師として、安全に学校行事を運営することについて自信がもてた	357	3.73	0.86	

分野	学校インターンシップアンケート事前事後アンケート項目
習慣1	児童の一人一人の実態の把握を心がけた(心がけたい)
習慣2	決まりを守ることの大切さの指導の仕方を観察することを心がけた(心がけたい)
習慣3	児童の生活習慣や学習習慣について、将来学級担任として指導していく自信がもてた(自信がある)
安全1	実習校での安全に対する取り組みについて理解を深めることを心がけた(心がけたい)
安全2	児童が学校で安全に生活するために、将来学級担任として指導していく自信がもてた(自信がある)
安全3	学校での安全を守るため、児童にとって危険がないか常に気を使っていた(気を使いたい)
ICT1	実習校でのICT機器の活用状況について観察することを心がけた(心がけたい)
ICT2	ICT機器の効果について理解を深めることを心がけた(心がけたい)
ICT3	将来教師としてICT機器を活用していく自信がもてた(自信がある)
マナー1	教師としてふさわしい言葉づかいや身だしなみを心がけた(心がけたい)
マナー2	教員としての身だしなみの大切さを理解することができた(理解している)
マナー3	将来社会人としてのマナーを身につけた教師になる自信がもてた(自信がある)
英語1	外国語活動による児童への効果について理解を深めることを心がけた(心がけたい)
英語2	英語でコミュニケーションを図ることができるように学級担任がどのような工夫をしているのかを観察することを心がけた(心がけたい)
英語3	児童に英語のコミュニケーション能力を養うために、将来学級担任として指導していく自信がもてた(自信がある)
学級1	子どもたちとの信頼関係を築くために、子どもたちとの関わり方を工夫する努力をした(努力をしたい)
学級2	クラスでの集団活動の大切さを伝えるような働きかけを心がけた(心がけたい)
学級3	学級での規律づくりの仕方を観察することを心がけた(心がけたい)
特支1	発達障害の子どもたちについての理解を深めることができた(理解を深めたい)
特支2	発達障害の子どもの個性に即した対応ができるように心がけた(心がけたい)
特支3	将来教師として発達障害の子どもたちとの関わるることについて自信がもてた(自信がある)
教科1	ねらいを明確にし、系統立てた授業計画を立てることを心がけた(心がけたい)
教科2	設定したねらいについて、子どもたちがしっかりと理解できているかを確認することを心がけた(心がけたい)
教科3	将来教師として、学ぶ意欲を引き出すような授業を行う自信がもてた(自信がある)
行事1	学校行事を通して育まれる力がどのようなものかを理解することができた(理解している)
行事2	学校行事の体験を日常の学級生活に生かすためにどのような工夫をしているのかを観察することを心がけた(心がけたい)
行事3	将来教師として、安全に学校行事を運営することについて自信がもてた(自信がある)

第8章 平成28年度の本学「学校インターンシップ」の運営

を巡って

(長期的には、平成27年12月に出た中教審答申を踏まえた「学校インターンシップ」の法制化も視野に入れ)

- ①学校インターンシップ体験校側依頼票と平成27年度県教委9講座のコンピテンシー(資質能力)との関係
- ②本学と近隣市町村教委との教育実習等連携協議会での「学校インターンシップ」と資質能力の関係の説明
- ③平成28年度での県教委講座と従来の聖徳学園大学教員側義務講座の関係

以上3点を明確にする。

改定した「学校インターンシップ体験校側依頼票(岐阜聖徳学園大学教育学部学校インターンシップ 支援活動依頼記入用紙)」も付す。

平成 28 年度の本学「学校インターンシップ」の運営を巡って

(長期的には、平成 27 年 12 月に出た中教審答申を踏まえた「学校インターンシップ」の法制化も視野に入れ)

- ①学校インターンシップ体験校側依頼票と平成 27 年度県教委 9 講座のコンピテンシー (資質能力) との関係
- ②本学と近隣市町村教委との教育実習等連携協議会での「学校インターンシップ」と資質能力の関係の説明
- ③平成 28 年度での県教委講座と従来の聖徳学園大学教員側義務講座の関係

以上 3 点を明確にする。

%%%

(長期的には、平成 27 年 12 月に出た中教審答申での、教育実践に関する科目 (選択科目) としての「学校インターンシップ」の法制化も視野に入れている)

学校インターンシップ体験校側依頼票と平成 27 年度県教委 9 講座の項目との関係：

学校インターンシップ体験校が記入送付する学校インターンシップ支援活動依頼記入用紙に、新たに、関連するコンピテンシー (資質能力) を書く欄をもうけ、現実の学校インターンシップと各コンピテンシーの関連の把握、および新しいコンピテンシーの開拓を図る。：具体的には、[支援活動の内容]・[活動時間及び必要人数]と[支援活動内容の詳細]の間に次を入れる：

「◆①から⑩で体験から得られる資質能力があれば選んでください(複数記入可)。◆

- ①生活習慣・学習習慣指導 ②学校の安全 ③ICT 活用 ④社会人としてのマナー
- ⑤外国語活動支援 ⑥学級経営の実際 ⑦児童生徒への特別な支援
- ⑧教科指導 ⑨行事の実際 ⑩その他 ()

平成 28 年 1 月 29 日金曜日の近隣市町村教委との連携協議会での説明

学校インターンシップで形成しうるコンピテンシー(資質・能力)を解明促進すべく平成 27 年度文部科学省初中局「総合的な教師力向上のための調査研究事業」に採択された本学調査研究「学校インターンシップの改善 ―コンテンツからコンピテンシーへの飛翔―」について簡単に説明し、学校インターンシップ支援活動依頼記入用紙の変更について述べる。

平成 28 年度以降の県教委講座提供依頼について

長期的には、今後も継続的に県教委講座を提供して頂くよう県教委に依頼するために、大学と県教委の間の枠組みが必要である。こうしないと県教委講座が永続せず数年で立ち消えになりうる。平成 27 年 12 月に出た中教審答申で言及されている (各県教委を中心に、県内市町村教委、県内教員養成大学をまじえた) 教員育成協議会がその枠組みに資するであろう。それまでは、県教委 OB である大学教員に、間に入って頂き繋げて行く。

平成 27 年度の県教委講座を終えて、県教委の反応は色よい。

県教委講座実施時期であるが、今年度は急に決まったこともあり 6 月末から 7 月末までになり、定期試験期間に被ってしまった。平成 28 年度は、勿論お引き受け頂く県教委の御都合を最

大限考慮しつつ、<6月中旬から7月前半> および <(小中学校教育実習後である)12月中旬から1月前半> の線をお願い申し上げます。

3月中に、県教委まで打診にうかがう。定例人事異動後である4月に再度うかがう。

平成28年度での県教委講座と岐阜聖徳学園大学教員側義務講座の関係

・「学校インターンシップ」に登録する学生には、従来の必修講座3つ[事前指導1回目(総論)(山内先生)・事前指導2回目(発達障碍講座)(学校心理専修・特別支援専修、平成27年度は譲先生)・事後指導](補講もする形で登録者全員が完全に受講している)だけでなく、県教委講座(基礎編・応用編)から3つ以上という形で選択必修させる(つまり「学校インターンシップ」修了学生に授与しているボランティア認定証授与の条件にする)。この県教委講座の選択必修化は、平成28年度の大学3年生から適用する。

なお、事前指導1回目・2回目を受講した時点で体験校での活動が開始できる。県教委講座は、活動期間中に受講する形で良い。

学校インターンシップと教育実習の関係

・教育実習に行く全学生に「学校インターンシップ」に登録させ、教育実習後も、つつがなく(保険の掛かった状態で)実習校で活動できるようにするアイデアについて議論した。現行でも、教育実習校から教育実習課に正式に依頼が届けば、「学校インターンシップ」登録学生でなくても(保険の掛かった状態で)実習後も実習校で活動できるので、問題はないとの指摘があった。

・学校インターンシップでは、教育実習前である3年生前期から積極的に体験校に行かすべく、教育実習校事前打ち合わせで、実習校が許容すれば児童生徒の前に出る体験(インターンシップ)も行い、実習をする理由・課題を見つけてくるアイデアについて議論した。実習校事前打ち合わせが夏休み中に行われる場合が多く児童が校内にいない事、実習校事前打ち合わせが学校行事のある日に設定され児童との関わり場でなく設営支援オンリーの場になりうる弊害の起こりうる事、の2点の指摘があった。

その他(学校インターンシップ代表教員、岐阜県教委OB教員との話し合い)

・学校インターンシップを支え実行する教員組織がなく、学校インターンシップ代表教員一名および善意の有志が支えている。また、今年度の「学校インターンシップの改善」に伴う実務も、本来は企画立案する委員会であるGP委員会が行った。教育実習委員会は、学外実習に関する基本方針を立案し学外実習の指導に当たる機関であるが、「触れ合い」「実践観察」の場合と同様に教育実習委員会の下に「学校インターンシップ」を支える組織が必要であるとの方向性が出た。また、クリスタルプランの当初では、学校インターンシップは、教育実習委員会の傘下にあったことが指摘された。

・学校インターンシップの体験先を、大学所在地の岐阜県内だけでなく、通学生が多い愛知県内に広げるアイデアについて議論した。実習科目を愛知県内でも実施する方向性については、平成28年度特別予算等要求書として2015年10月教授会に他の部署から提案されており、学部内の他の部署でも検討が進んでいることが指摘された。また、個人レベルで名古屋市トワイライトスクール事業などに関わっている学生が既にいることも指摘された。

- ・事後指導を振り返り（省察・リフレクション）の機会にするアイデアについて議論した。学生たちを小グループに分けて経験の語り合いをした後に全体で共有する方法であるが、体験校がまちまちであり効果的でないとの指摘があり、振り返りについては今後の検討課題とした。
- ・学校インターンシップが法制化される近未来では、継続的な（単位取得を目指す）「学校インターンシップ」と単発的な（お手伝いの）「学校ボランティア??」というように、分けなければならないとの指摘がなされた。

岐阜聖徳学園大学 教育学部 学校インターンシップ 支援活動依頼記入用紙

※大学記入欄

年度		学校コード		活動番号	
----	--	-------	--	------	--

必要事項をご記入ください。

学校名	立 学校				
担当者名	TEL () -				
メールアドレス					
自動車の使用	可 (駐車場 台) ・ 不可	バイクの使用	可 ・ 不可		
希望学生がない場合の連絡	必要 ・ 不要	連絡期限 (左欄 必要の場合)	月 日 () まで	活動日の	日前まで

※「希望学生がない場合の連絡」を“不要”とされましたら、学生からの申込みがあった場合のみ連絡させていただきます。

※「連絡期限」は大学から貴校へ希望学生がないことを連絡する期限です。期限日時をご記入ください。

◆支援活動の内容 (詳細な内容がある場合は別紙を添付してください)◆

◆活動時間(期間・曜日・時限など)及び必要人数◆

○曜日・時限等が決まっている場合

曜日	時間	人数	備考
月・火・水・木・金 曜日	: ~ :	名	
月・火・水・木・金 曜日	: ~ :	名	
月・火・水・木・金 曜日	: ~ :	名	
月・火・水・木・金 曜日	: ~ :	名	
月・火・水・木・金 曜日	: ~ :	名	

○曜日・時限が決まっていない場合

◆①から⑩で体験から得られる資質能力があれば選んでください(複数記入可)。◆

- ①生活習慣・学習習慣指導 ②学校の安全 ③ICT活用 ④社会人としてのマナー
 ⑤外国語活動支援 ⑥学級経営の実際 ⑦児童生徒への特別な支援
 ⑧教科指導 ⑨行事の実際 ⑩その他 ()

◆支援活動内容の詳細◆

具体的な活動内容 (学生にあらかじめ連絡しておきたいことなど)、持ち物、服装などがあれば、こちらに記載してください。別紙に記載したものを添付していただいてもかまいません。

第9章 平成27年度文部科学省公募調査研究本学申請書

平成27年度文部科学省初等中等局公募「総合的教師力向上のための調査研究事業」への本学企画提案書「学校インターンシップの改善 ―コンテンツからコンピテンシーへの飛翔―」と経費計画書を置く。

平成 27 年 1 月 28 日

文部科学省初等中等教育局長 殿

所在地： 岐阜県岐阜市柳津町高桑西 1 丁目 1 番地

申請機関： 岐阜聖徳学園大学

代表者職名： 学長

氏 名： 藤井 德行

総合的な教師力向上のための調査研究事業の委託を希望しますので、別紙の事業計画書のとおり企画提案します。

総合的な教師力向上のための調査研究事業 事業計画書

実施テーマ	<input type="checkbox"/> 初任者研修の抜本的な改革 ※ 別紙様式1-1による。
	<input type="checkbox"/> 教師塾の拡充
	<input checked="" type="checkbox"/> 教育課題に対応するための教員養成カリキュラム開発
	<input type="checkbox"/> 管理職を養成する仕組みの確立
	<input type="checkbox"/> 教員免許状を持たない専門的な知識・技能のある優れた人材登用の促進

調査研究主題	学校インターンシップの改善 —コンテンツからコンピテンシーへの飛翔—
--------	------------------------------------

調査研究実施機関		
機 関 名	(岐阜聖徳学園大学)	
代 表 者	職 名	学長
	(ふりがな)	ふじい のりゆき
	氏 名	藤井 德行
事業実施責任者	所属部署・職名	教育学部・学部長(教授)
	(ふりがな)	かしわざい よしあき
	氏 名	柏木 良明
	電 話 番 号	058-279-0804 (代)
事務連絡担当者	所属部署・職名	羽島教務課・課長
	(ふりがな)	さわだ みえこ
	氏 名	澤田 三枝子
	住 所	岐阜県岐阜市柳津町高桑西1丁目1番地
	電 話 番 号	058-279-0804 (代)
	F A X 番 号	058-279-4171 (代)
	E-mailアドレス	mieko@shotoku.ac.jp

1) 実施体制		
所属部署・職名	氏 名	役割分担
教育学部・教授	福田 茂隆	教育学部 GP 委員長 (実務責任者)
教育学部・准教授	佐藤 善人	教育学部 GP 副委員長 (実務副責任者)
教育学部・准教授	阿部 慶賀	教育学部 GP 委員 (電子ポートフォリオ構築)
教育学部・教授	吉田 俊和	教育学部 GP 委員 (基礎学力・教養教育委員長)
教育学部・准教授	高村 和代	教育学部 GP 委員 (教育心理学)・現岐阜県教育委員会初任者研修助言者
教育学部・准教授	龍崎 忠	教育学部 GP 委員 (学校教育学)

教育学部・専任講師	中島 葉子	教育学部 GP 委員 (学校教育学)
教育学部・教授	小田 勝	教務部長 (教員養成カリキュラム委員長)
教育学部・教授	成田 幸夫	附属学校担当部長 (クリスタルプラン委員)
教育学部・教授	内藤 静雄	教育学部教務委員長 (クリスタルプラン委員)
教育学部・教授	鈴木 明裕	教育学部実習委員長 (クリスタルプラン委員)
教育学部・教授	山内 紀夫	「学校インターンシップ」担当
教育学部・教授	讓 西賢	教育相談指導
教育学部・教授	石原 一彦	情報教育研究センター長 (ICT 指導・電子ポートフォリオ構築)
教育学部・教授	小林 直樹	教育委員会連携担当
教育学部・専任講師	森田 匡俊	学校安全指導
羽島教務課・課長	澤田 三枝子	事務
羽島教務課	玉木 伸明	事務
教育実習課・課長	加藤 弘和	事務
教育実習課	岡崎 直樹	事務
情報教育センター	江口 廣晃	事務

2) 課題認識

本学教育学部の教員養成課程においては、単に教員免許状の取得を目的とするのではなく、教育実習以外に 1 年次から 4 年次まで学生が児童生徒と関わる機会を設け、教育の今日的課題を実感しつつ実践的指導力の育成を目指している。教育現場において学生が体験的に学習する取組は、他大学でも多く実践されるようになってきており、またそれにともない学習効果等の研究も蓄積されつつある。そのなかでも「学校インターンシップ」などの名称で行われる学校現場の実際を知ることを主たる目的とした体験的学習は多くの場合、対象者が全学年や 2 年次から 4 年次というように幅が広く、教育実習を経験する前の学生と経験した後の学生が切り分けられることなく同じプログラムで学習する傾向にある。しかしながら、教育実習前後では、学生が獲得すべきコンピテンシー (資質・能力) も学校現場が学生に求める実践的指導力も異なるはずである。この点を看過したままプログラムを実施すれば、ともすれば、目先のコンテンツ (活動内容) 消化の連続に陥りかねない。とくに教育実習後の 3 年次後期から 4 年次にかけて行われる体験的学習は、そこで体験すれば、新任教員としてのコンピテンシー (資質・能力) が形成されていくだろうという、やや牧歌的な傾向が本学でもある。そうではなく、現場で新任教員に求められる実践的指導力を明確化した上で、卒業後に有為な人材となるべく学生の資質形成をする方向で、教育現場での体験的な学習を体系化しなければならぬ。教育実習を経たうえで行われる長期にわたる「学校インターンシップ」は、それまでに積み上げた経験をもとに、新任教員に求められる実践的指導力をより具体的に育成する体験的な学習として、開発される必要がある。

3) 現状の取組

2005年に教員養成GP「クリスタルプラン」に採択され、1年次に必修科目「学校ふれあい体験」(教育現場で学校を知る)、2年次に必修科目「教育実践観察」(教育現場で授業を知る)、3年次に必修科目「教育実習」、3・4年次に選択科目「学校インターンシップ」を実施している。また、大学に近隣小学校の児童を集め学生と体験活動する選択科目「フレンドシップⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」も実施している。

このうち「学校インターンシップ」であるが、主に教育実習を行う近隣の幼・小・中学校で、学校からの多様な依頼に応じ、対応可能な学生が教育ボランティア活動を実施するものである。当初は、単位化していたが、学校から依頼されるコンテンツがまちまちで、いかなる資質形成がなされるか不明確な点があり、現状では単位化は休止しボランティア修了証のみを発行している。「学校インターンシップ」はボランティアとして行われ、学生の自発的な学習の場になるべき点からも単位化は休止した経緯がある。一方で、単位化することによって、より学生の「学校インターンシップ」への参加が増加し、多くの体験的な学習が保証されるとの意見もある。しかし、そこで何を修得しているのか、あるいは修得すべきなのかという議論には十分に至っていないのが現状である。

また、本学では、教員採用試験合格を単なる到達点とは捉えず、4年次後期に課外として、教員採用試験合格者および小中学校常勤講師登録希望者を対象に、模擬授業などを課し校長経験者が講評する「教員養成講座」を卒前教育として行っている。しかし、この取組と「学校インターンシップ」における学習成果との関連は十分には検討されていない状況にある。

3-A) 教育委員会・大学・独立行政法人教員研修センター等との連携

3-a) 連携の有無

連携先の種類	有 無	具体的な連携先
教 育 委 員 会	<input checked="" type="checkbox"/> 有 <input type="checkbox"/> 無	(教育実習協力校のある市町村の教育委員会：岐阜市・羽島市・各務原市・山根市・瑞穂市・本巣市・羽島郡二町・北方町・大垣市・海津市・垂井町・関ヶ原町・神戸町・輪之内町・安八町・揖斐川町・大野町・池田町・関市・可児市・土岐市・恵那市・高山市)
大 学	<input type="checkbox"/> 有 <input checked="" type="checkbox"/> 無	()
独 立 行 政 法 人	<input type="checkbox"/> 有 <input checked="" type="checkbox"/> 無	()
教 員 研 修 セ ン タ ー		
そ の 他	<input type="checkbox"/> 有 <input checked="" type="checkbox"/> 無	()

3-b) 連携内容 (連携先がある場合は、記入すること。)

本学は、教員養成科目実行の場を確保するにあたり、近隣の市町村教育委員会と連携協定を結んでいる。その枠組みの中で、1年次に「学校ふれあい体験」、2年次に「教育実践観察」、3年次に「教育実習」を計画的に実施している。学生が児童生徒とともに学ぶこの取組は、連携先の学校の評価も高く、また、学生に対する学校からの指導は学生の教員就職意欲を高めており、全国的にも高い教員就職率を保持する一因となっている。さらに、「教育実習」後も実習校等の多様な依頼に応じ教育ボランティア活動も行っている。これが「学校インターンシップ」である。

4) 調査研究の目的

現状の「学校インターンシップ」(教育ボランティア活動)は、実習校から依頼されたコンテンツ(活動内容)を消化する中で、実践的指導力(教師として求められる資質・能力)も向上するだろう、という希望的観測で実施されている曖昧さがある。

そこで、教育行政と協働のうえ、現場で新任教員に求められる指導力のうち、主に教育実習後の学生(3年次、4年次学生)を対象に実施される「学校インターンシップ」で形成しうるコンピテンシー(資質・能力)が何であるか解明し、これらコンピテンシー(資質・能力)の獲得を促進すべく「学校インターンシップ」の運営を抜本的に改革し、受動的なコンテンツ(活動内容)消化主義から脱却し、能動的なコンピテンシー(資質・能力)獲得主義に飛翔し、授業科目(単位)としてあるべき姿にするカリキュラム改革に向けた調査研究を行う。

県教委が行う初任者研修が卒後教育であるとすれば、「学校インターンシップ」を(新任教員になる前に大学で確実にこれだけのコンピテンシー(資質・能力)を身に着けさせるという)卒前教育として位置付ける可能性を追求するわけである。「学校インターンシップ」は教育現場で実施する体験的なプログラムであり、4年生後期の「教職実践演習」と連動して実施することで、卒前教育としての相乗効果をねらう。

5) 調査研究の具体的な内容・取組方法

義務教育においては、市町村教委と都道府県教委で、それぞれコンテンツ提供と人材獲得育成という分業がある。この特性に注目するのがポイントである。

この調査研究に関連する機関は、大学、県教育委員会、市町村教育委員会、実習校(小中学校)である。大学は、県教委とは教員志望学生に求められるコンピテンシー(資質・能力)に関し協議し、市町村教委および実習校とは教員志望学生のボランティア活動の場の確保で連携する。効果の促進において、大学は、県教委および市町村教委と開設講座の講師の提供で連携する。効果の検証においては、データの提供で実習校に依存し、データの分析では主に県教委と連携する。

以下、調査研究課程を、順番に述べる。

1. 県教委と連携し新任教員に求められるコンピテンシー(資質・能力)を突き止める。

これをベースに仮説として「学校インターンシップ」で獲得しうるコンピテンシー(資質・能力)を想定し、項目化する。同時に、これらコンピテンシー(資質・能力)の獲得を促進するために何をなすべきか、及びその獲得の検証方法も決定する。その際、文部科学省が示す「教職実践演習において求められる教員の資質能力」の4つの事項との関連を視野に入れて検討する。

2. 本学と連携協定を締結した市町村教委の指導の下にある実習校からの学校ボランティア依頼票の書式を改定し、其々の学校ボランティア活動で形成されそうな資質項目に○付けをしてもらう。

3. 事前指導により、これら資質項目をボランティア学生に意識化した状態で活動に赴かせ、そのプロセスを「電子ポートフォリオシステム」に追加し、学習を促進しかつ追跡する。なお、本学ではすでに電子ポートフォリオシステムは構築されており、学生の学習成果の確認、教員の学生指導等に活用されている。

4. これら資質項目の獲得を促進すべく、1.で議論された資質項目に対応した単発の講座を多数開設する。現状では、「事前指導(総論)」、「事前指導(発達障がい理解)」、「事後指導(まとめ)」の3種のみでの開講であるが、あらたに、「学校ボランティア論」、「学校の安全」、「外国人児童生徒への対応」、「TT

の技法]、「ICT活用（電子黒板など）」、「外国語活動支援」、「野外活動支援」、「体力・運動能力の向上」などを想定している。また、より高度のコンピテンシー（資質・能力）の獲得を目指すべく、「多様な学習形態」「『子ども』の捉え方」の講座なども考えている。ここでの学びを土台として、「学校インターンシップ」の実習先で期待される実践的なプログラムを学生が主体的に開発し、実習先の学校に提案・実践していく。すでに本学の学校心理課程では山間部小規模校参観において、児童の「対人関係能力」を育むプログラムを学生が主体となって開発・実践した実績があり、そのノウハウを活用する。

5. 年度末に、学生に自己評価アンケートを実施し、各資質項目の向上について、回答させる。また活動報告レポート提出も課す。

6. 年度末に、「学校インターンシップ」を利用した各学校に対して調査を行い、参加学生が新任教員に求められるコンピテンシー(資質・能力)を獲得できたか評価してもらおう。また、資質項目についても再点検を依頼し、新任教員に求められるコンピテンシー(資質・能力)をより明確化にする。

7. 年度末に、仮説項目、ボランティア依頼票回答内容、ポートフォリオ記述内容、講座担当教員の感想、学生のアンケートとレポート、「学校インターンシップ」を利用した学校に対する調査結果を分析し、調査研究結果を取りまとめる。(但し、前期末に中間検証を挟む。)これが次年度に向けた改善になる。

以上の「学校インターンシップ」における調査研究の成果は、教職実践演習を含めた卒前教育の充実に資するものと考えられる。

6) 調査研究における教育委員会・大学・独立行政法人教員研修センター等との連携

6-1) 連携の有無

連携先の種類	有	無	具体的な連携先
教育委員会	<input checked="" type="checkbox"/> 有	<input type="checkbox"/> 無	(岐阜県教育委員会及び教育実習校のある市町村教育委員会)
大学	<input type="checkbox"/> 有	<input checked="" type="checkbox"/> 無	()
独立行政法人 教員研修センター	<input type="checkbox"/> 有	<input checked="" type="checkbox"/> 無	()
その他	<input type="checkbox"/> 有	<input checked="" type="checkbox"/> 無	()

6-2) 連携内容（連携先がある場合は、記入すること。）

岐阜県教委で実施される初任者研修について情報収集し、新任教員に求められるコンピテンシー(資質・能力)を、大学側が具体的に認識する。

それらをもとに構築する「学校インターンシップ」で獲得しうるコンピテンシー(資質・能力)の仮説に基づき、資質項目の獲得を促進する講座に、岐阜県教委及び連携市町村教委からの出講を依頼する。

中間検証・調査研究結果の取りまとめの過程において、担当教員団が岐阜県教委及び連携市町村教委と討論する。

7) 調査研究の実施計画

4月	<p>県教委と、新任教員養成および初任者研修の内容について情報交換。</p> <p>「学校インターンシップ」で獲得しうるコンピテンシー(資質・能力)の仮説を学内決定。および、その促進方法・検証方法の学内決定。(注：これにより、以下の講座のテーマは変更しうる。)</p> <p>学校ボランティア依頼票の書式改定と発送。</p> <p>「学校インターンシップ」用の電子ポートフォリオシステムの構築。</p> <p>対学生「学校インターンシップ」講座：事前指導（総論）【義務】</p> <p>対学生「学校インターンシップ」講座：事前指導（発達障がいの理解）【義務】</p> <p>学生の教育ボランティア活動開始</p>
5月	<p>対学生「学校インターンシップ」講座：学校ボランティア論【義務】</p> <p>対学生「学校インターンシップ」講座：学校の安全（基本）【義務】</p> <p>対学生「学校インターンシップ」講座：外国人児童生徒対応【選択】</p> <p>対学生「学校インターンシップ」講座：TTの技法【選択】</p>
6月	<p>対学生「学校インターンシップ」講座：ICT活用（電子黒板など）【選択】</p> <p>対学生「学校インターンシップ」講座：外国語活動支援【選択】</p> <p>対学生「学校インターンシップ」講座：野外活動支援【選択】</p> <p>対学生「学校インターンシップ」講座：体力・運動能力の向上【選択】</p>
7月	<p>（大学前期末テスト）</p>
8月	<p>前期終了を受けて中間検証（県教委及び連携市町村教委を交える）</p>
9月	<p>小学校教育実習のため3年生の活動は休止</p>
10月	<p>対学生「学校インターンシップ」講座（上級）：「多様な学習形態」【選択】</p> <p>対学生「学校インターンシップ」講座（上級）：「『子ども』の捉え方」【選択】</p>
11月	<p>中学校教育実習のため3年生の活動は休止</p>
12月	<p>対学生「学校インターンシップ」講座：学校の安全（応用：感染症対策）【選択】</p> <p>学生の教育ボランティア活動終了</p>
1月	<p>対学生「学校インターンシップ」講座：事後指導（まとめ）【義務】</p> <p>（大学後期末テスト）</p> <p>学生自己評価アンケート</p> <p>学生活動報告レポート提出</p>

	「学校インターンシップ」利用学校に対する調査
2月	調査研究結果取りまとめ（県教委及び連携市町村教委を交える）
3月	報告書の作成、及び発行

8) 過去の調査研究実績	
<p>過去に本学で、友田・山内の両教員が、「学校インターンシップ」を用いた「教職実践演習」のプログラム開発の可能性を探って下記文献で研究報告を行った。次年度4月から教壇に立つ大学4年生に対する卒前教育として、「学校インターンシップ」の中で、学級経営力・授業実践力の2点に特化し強化するものであった。</p> <p>但し、その後、必修科目「教職実践研修」の趣旨が明確になるとともに、同科目への「学校インターンシップ」取り込みは、試行のみで終了した。その研究の先駆性は、他誌にも引用されたことで明白である。</p> <p>【文献】友田靖雄・山内紀夫（2008）．学校インターンシップを活用した教職実践特別演習（試行）．弘前大学教員養成学研究, 4, 35-43.</p>	

9) 再委託に関する事項	
再委託の相手方の住所及び氏名	
再委託を行う業務の範囲	
再委託の必要性	
再委託の額	
別紙様式2及び3のとおり。	

10) 経費計画	
別紙様式2のとおり。	

資料1 (平成26年1月 本学より連携市町村教育委員会担当者宛 文書)

平成26年度 学校インターンシップの実施にあたって

1 学校インターンシップの趣旨

この活動の目的は、学生が児童・生徒の学力向上支援や発達障がい児・不適応児童・生徒への学習支援、個別指導支援、生活指導支援等を通して、教職に就いたとき即応できる実践的指導力を身に付けることにある。本学教育学部学生については、1年生での「学校ふれあい体験」、2年生での「教育実践観察」を通して系統的に教職体験を学修させ、3年生での教育実習では、学習指導、学級経営、生徒指導の実際を学ばせている。この間、教科・教職科目等の講義ともリンクさせ教職体験に理論的な背景をもたせている。そのような学修を積んだ学生に、さらに教育実習までに体得した教育実践力・責任感を駆使して学校インターンシップに臨ませ、教育の臨床的な場面で、教師の指導を仰ぐ中で子どもの学習・生活支援を体験させ、教育現場でより適切に対応できる実践的指導力を身に付けさせたい。

2 学校インターンシップの内容(例)

(1) 学力向上指導支援活動に関して： ①放課後、学習の遅れ気味の児童・生徒に対して個別の指導補助を行う。 ②放課後、宿題に取り組む児童の指導助言をする。 ③算数(数学)・国語・英語の授業中、学級担任や教科担任の指導補助として、理解の遅い児童・生徒等に付いて、個別の指導補助に当たる。 ④児童・生徒の学習に対する悩みの相談相手となる。 ⑤夏休みなど長期休暇中に、学習の遅れ気味の児童・生徒に個別指導補助を行う。

(2) 体育・音楽の指導支援活動に関して： ①水泳指導の補助(プールの中に入って、技能の低い児童・生徒たちへの個別指導補助等) ②夏期水泳教室の泳力向上指導補助(夏休み中の水泳教室等) ③音楽指導補助(伴奏、発声等)

(3) 特別支援教育指導補助、教育相談補助に関して： ①不登校傾向(保健室登校の児童・生徒)の児童生徒に対する指導補助を行う。 ②学校生活に悩みを持つ児童・生徒に対して相談相手となる。 ③特別支援教育を必要とする児童・生徒への指導補助を行う。(i)授業中、該当児童・生徒に付いて、個別の指導支援を行う。(ii)学校生活の中での生活支援を行う。

(4) 行事指導支援活動に関して： ①遠足、運動会、児童会行事、社会見学、生活科校外学習、野外学習等学校行事の指導補助を行う。(引率指導補助、活動中の指導補助等)

(5) 通学合宿中の学習相談(羽島市、生活グループで合宿しながら通学する制度)

(6) その他： ①休み時間や放課後の遊び指導補助を行う。

3 学校インターンシップの実施に当たって

(1) 上記の学校インターンシップにおける教育支援活動は、大学での履修状況等を踏まえた学生の日程と、活動先の小・中学校の希望とを照らし合わせて、双方の都合の良いところで活動内容・活動日時が決められる。

(2) 大学での授業のみならず、学生側が教育実習、帰省、クラブ活動、旅行等の予定があるときは、事前に活動先の小・中学校へ連絡させるので学生の事情を考慮していただきたい。

(3) 学校インターンシップ活動に参加する学生を対象に、大学では「**学生教育研究災害傷害保険・学研災付帯賠償責任保険**」に加入しているので、インターンシップ先の小・中学校への往復、活動後の事故には、同保険が適用される。

(4) 学校インターンシップでの教育支援活動はあくまでも本学の教育の一環として実施するので、賃金等は一切いただかない。但し、学生の活動がより充実したものとなるよう、学校現場の先生方にご指導をお願いし

たい。(単に労働を提供する活動は控えていただくようお願いする)

(5) 2014年度も、ボランティア活動として実施する。

(6) 活動できる学生は事前に大学において登録し、事前指導を受講した者を原則とするが、実習校先から指名されての受け入れ申し出があった者は上記手続き等の省略を認める場合がある。

資料2 (平成27年1月 本学より連携市町村教育委員会担当者宛 文書)

平成26年度 学校インターンシップの成果と課題

1. 成果

今年度も小・中学校及び教育委員会から多数の活動受け入れの申し出をいただいた。活動内容は、(1)学力向上支援、(2)特別支援、(3)学校行事支援、(4)クラブ活動支援及び地域連携活動、の4種類に大別され、多数の学生が種々の活動を体験できた。数年前からの傾向として、3年生でも前期から活動する学生が増えつつあり、そのような学生は年間を通してあるいは卒業年次まで同一校で継続して活動する機会が多いことがあげられる。したがって4年生は3年次から継続して(同じ学校で)活動する者が多い。また3・4年生に共通して自身の教育実習校からの指名で受け入れ申し出をいただく学生数が増加傾向にある。活動の態度・成果についてはほとんどの活動先からは好意的な評価をいただいている。特に優れた実践を行った学生については担当の先生から大学に感想を寄せていただくこともある。

活動した学生の感想としては

- ・教育実習などでは出来なかった色々な教育活動が体験できた。
- ・子ども(児童・生徒)との対応についてさらに学ぶことが出来た。
- ・活動先で丁寧に指導していただいたことに感激し感謝している。

などが聞かれた。

2. 課題

- ・各小・中学校からの希望は多いが学生の事情(活動の場所・時間、大学での授業等)で希望にそえないことがある。
- ・時期については、3年生は教育実習終了まで、4年生は教員採用試験終了までは活動時間が十分に持てないので活動時期が年度の後半に偏る傾向が残っている。
- ・地域(交通の便など)や活動内容についても希望者の偏りがある。ただし、行事的な活動のみでなく、学力向上や特別支援等では年間を通じた活動を行う学生も増加している。

活動内容について、次の2点を基本として進めている：

- ①児童・生徒と直接ふれあう教育的活動であること
- ②学校または教育委員会が主体である活動であること

上記に必ずしも当てはまらない活動の申し出をいただくこともあるが、その場合学生にとって有益であるかを本学のインターンシップ担当者が協議して判断している。

経 費 計 画

費 目	種 別		内 訳		
	種別小計	摘 要	積 算	金 額	
人件費	賃金	12,800円	アルバイト(アンケート結果データ入力)	800円/時間×16時間	12,800 円
	人件費小計	12,800円			円
事業活動費	諸謝金	360,000円	「学校インターンシップ」講座の学外講師謝礼	3万円/人×12人	360,000 円
					円
					円
					円
					円
	旅 費	265,000円	学生ボランティア活動の巡回(23の市町村教委)	5千円×23	115,000 円
			県教委との打ち合わせ(月例:1名)	2千円/回×12回	24,000 円
			近隣3市町村教委とアンケートの打ち合わせ	2千円×3	6,000 円
			視察(大学・教育委員会)	3万円/人×4人	120,000 円
	会議費	15,000円	県教委と初任者研修について情報交換(弁当代)	千円×5	5,000 円
			県教委と中間検証(弁当代)	千円×5	5,000 円
			県教委と調査研究結果取りまとめ(弁当代)	千円×5	5,000 円
	通信運搬費	24,000円	アンケート等郵送費	120円×50校×4	24,000 円
					円
					円
					円
	印刷製本費	200,000円	調査研究結果報告冊子印刷・製本	400円×500冊	200,000 円
					円
					円
	借損料	0円			円
					円
					円
	雑 役 務 費	0円			円
				円	
				円	
消耗品費	620,000円	電子ポートフォリオ機能拡張・プログラム外注 (学生の教育ボランティア活動での学習過程管理)		600,000 円	
		コピー用紙A4	5000枚	3,000 円	
		封筒角2	50枚×4回×2(往復), 200枚(報告書)	7,000 円	
		インク(アンケート印刷用)	5千円×2	10,000 円	
消費 税 相 当 額	0円			円	
事業活動費小計	1,484,000円			円	
一般管理費	一般管理費	0円		円	
再委託費	再委託費		(再委託にかかる経費を記入する。)		
合 計		1,496,800円			

※ 一般管理費の摘要・積算欄には、「企画提案書 作成上の留意事項」で示した①、②又は③のどれを適用したかを記入すること。
 ※ 行は、適宜追加すること。

本報告書は、文部科学省の初等中等教育等振興事業委託費による委託事業として、岐阜聖徳学園大学が実施した平成27年度「総合的な教師力向上のため調査研究事業」の成果を取りまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続が必要です。

平成27年度文部科学省初等中等局公募

「総合的な教師力向上のための調査研究事業」採択プログラム

「学校インターンシップの改善 —コンテンツからコンピテンシーへの飛翔—」
平成27年度成果報告書

発行 岐阜聖徳学園大学教育学部

発行日 平成28年3月31日

郵便番号 501-6194 岐阜県岐阜市柳津町高桑西1丁目 岐阜聖徳学園大学

電話 058-279-0804

F A X 058-279-4171

